水槽の底歳時記

Written by Suiren

目次

プロローグ　4

春のおはなし

1　完璧なポフ　5
2　モンスターとの出会い　25
3　次に会うとき　42
4　ともだち　68

おはなしの続きは……　77

プロローグ

水槽の底には様々なものが集まる。誰かに捨てられ、あるいは忘れられ、もしくは何かに運ばれて。

それらはみな、偶然、水面からゆっくり落ちてきたもの。花のようにひらひらと、月の光のようにやさしく。時が止まったかのように穏やかな、優しくたゆたう水の底へやってくる。そして水面を見上げて思うだろう。あそこはとっても眩しいな。ここもわりかし気分がいいな。そしてまた、いつのまにかふわりと立ち上がり、ゆっくりとどこかへ旅立つ。ゆらめく水面を目指して、来た時よりも、さらにやさしく。

降り注ぐ光を見て。水の流れを感じて。心臓の音を聞いて。ここにはあなた以外に誰もいない。きっと大丈夫。あなたはもうここで勇気を見つけた。

あなたはここへ、ひとりで沈んで来たのだから。

春のおはなし

1　完璧なポフ

ちゃぷん、と水面が揺れて、その男の子は静かに、美しく、そして誰にも気づかれないようにこっそり、池に落ちた。

水面から彼を見ていた魚が1匹、人が落ちてきたのに驚いて逃げた。水草がゆっくり揺れる。あたたかい春の日のことだった。

水の中はガラスのように澄んでいた。温かすぎず、冷たすぎない、ちょうどいい温度で、ゆっくりと水の流れもあった。男の子は金色の髪をゆっくりとくゆらせながら、重力に任せるまま沈んでいった。

池はそれほど深くない。澄んだ水が湧く砂利の底に、足先が届く。月に降り立つ宇宙飛行士のように、ワクワクしながら、でも慎重に、彼は砂利のベッドに横になった。そしてそのまま、水面を見上げた。

こんなに美しい景色はどこにもない。ここが水の中でなかったら、ため息をついていただろう。きらきらと光りながらやさしく水底に届く太陽の光は透明なカーテンのよう。水の流れで横にたなびく水草はビロードのベッド。白と黒の細かいキメの入った小石の底が、大理石みたいに見えてくる。

体の内側から聞こえてくるような、水が流れる音も心地よかった。聴いていると心が落ち着く。不思議な楽器のようでもあり、安心させてくれる誰かの歌のようでもある。彼は目を閉じてその音を聴きながら、想像する。

ここは、僕の場所。

今の僕は探検家で、この秘密の場所の第一発見者。ここに来る前何者だったのかは、今は関係ない。

彼の名前は鯉壱。マダラカガの男の子。二週間前、一人でここを見つけた。そして、ここに住んでいる。

鯉壱はこの場所が気に入っていた。魔法にかけられて、美しいまま時が止まっているみたいな、そういう雰囲気が良かった。まるで誰かに整えられたかのように美しく、穏やかで、迷子のマダラカガが住むのにぴったりの場所。だから彼はここに、「水槽の底」という名前をつけた。

鯉壱はしばらく池の底の景色を堪能して、それからソーダ水の泡みたいに、あっというまに水面に上がった。長くて太いマダラカガの尻尾も、水の中を泳ぐ時は役に立つ。水面から顔を出すと、水彩画みたいにやさしくぼやけた春の青い空が頭上に広がった。

池の反対側の岸へ視線をやると、遠くに大きな山と、それを背後に広がる森、そして手前に、木造のコテージが見えた。鯉壱がいまのところ住んでいる家だ。

深いチェリー色の木材でできた、二階建のコテージ。前の持ち主が、古くて使っていないからと譲ってくれた。大きな掃き出し窓から太陽の光をたくさん取り込めて、庭の方には広いウッドデッキもついている。デッキには白くて大きなパラソルもあった。

そのパラソルのところで、女の子が手を振っていた。遠くからでもわかる、長い長いミルクティー色の髪。ワンピースにエプロン姿。そして、コテージの二階まで届く、大きな身長。見間違えようがない。緑露だ。買い物から帰ってきたんだ、と鯉壱は思った。

遠くで手を振る彼女に、水面から片手だけ出して挨拶する。すると、彼女が右手にカゴを持ち、こちらへやってくるのが見えた。鯉壱は一瞬だけ、もう少し水の中にいたいな、と後ろ髪を引かれるような思いがしたが、結局びしょ濡れの体を岸へ引き上げた。このときがいちばんキツい。体が全部、鉛になったみたいになって、鯉壱は呻いた。

緑露はポフだ。二週間前、鯉壱がここに住むと決めたすぐ後くらいにやってきて、生活の手助けをすると言った。リヴリーの暮らしをサポートすること。それがポフの『使命』だそうだ。

「鯉壱様、また服を着たまま泳いだんですか？」

「緑露ちゃんも一回やってみて。きもちいいよ」

水を吸った服の重みによろめきながら立ち上がり、全身から水をぽたぽた垂らしながら鯉壱は言った。右のポケットがもぞもぞしている。ひっくり返すと、小さな銀色の小魚が慌てて出てきた。ぴたぴた跳ねる魚を、そっと水面に返す。その様子を、緑露は呆れていると言うよりも、不安そうな顔をして見つめていた。

緑露は鯉壱の頼み事を完璧にこなしてくれる。朝早くから起き出して、買い物へ行き、料理を作り、家事を手伝い、夜遅くまで家政婦のように、家を居心地良くしてくれる。宣言通りの「最強のサポーター」だ。でも、鯉壱がたまにこうやって思いつくまま自由に過ごすとき、緑露はほんの少しだけ、不安そうな顔をした。

「そうするのがお好きなんですよね、わかっています」

緑露は大きな体を折って鯉壱の隣にしゃがみ込んだ。身長は鯉壱の二倍くらいある。たくさん勉強するとポフは大きくなるのだと、出会ったとき彼女は誇らしげに言っていた。緑露は膝立ちになると、長くて綺麗な手でぎゅっと鯉壱の服を絞った。鯉壱は自分でできると思ったが、なんとなく手を引っ込めた。緑露の方が、自分よりずっと上手だ。彼女はありとあらゆる全てのことを、鯉壱より上手に、そつなくこなすポフだった。

鯉壱の服から滴り落ちた水が、彼の足元に大きな水たまりをつくった。緑露が、ふうとため息をついたので、鯉壱はつい、モゴモゴした声で言い訳をした。

「服と体の間に水がじわじわ入ってくる感覚がいいんだよ。水の中だとふわふわ浮かんでおもしろいし」

「でも心配になってしまいます、溺れてるんじゃないかって」

緑露がカゴからタオルを取り出して、鯉壱に渡しながら言った。鯉壱は急に申し訳ない気持ちになって、言葉が喉につっかえてしまった。

「大丈夫だよ。僕、泳ぎだけは得意だから」

受け取ったタオルに顔を埋めながら呟く。ふかふかであたたかい。温もりを顔に当てたまま歩いて行きたくなる。が、尻尾が地面についたら汚れてしまうだろう。タオルを持ったり、尻尾を持ったり、抱え直したりともたもたやってから、結局鯉壱は尻尾を大事に抱え、タオルは仕方なく頭に被ることにした。緑露はその間ずっと何か言いたげにこちらを見つめていたが、結局何も言わずに、鯉壱の後をついて歩きだした。

「探し物は買えた？」鯉壱は話題を逸らそうと、緑露に聞いてみた。

「はい。保護用のペンキを買い足しました」緑露は思い出したように言った。

「鯉壱様、昨日の続きをお願いできますか？　ペンキの扱いがとてもお上手でしたので」

鯉壱は、昨日二人で作った、小さな畑を囲う柵のことを思い出した。

二人はいま、少しずつコテージを改修している。屋根の色変えや壁の補強といった大工仕事も、緑露の手にかかれば朝飯前という感じだった。学校で習ったので、と彼女は胸を張り、鯉壱は、そんなことまで習うんだから、ポフの学校って相当すごいところなんだろうな……と思った。コテージの他に、植物に詳しい緑露が家庭菜園のスペースも作り、鯉壱はその柵を塗って、ついでに虫除けのお守り代わりにさまざまな模様を描いたのだ。思い出した。柵の残り半分のところで、ペンキが尽きちゃったんだっけ。

「わかった、任せて。新しい模様も描いてみるよ。適当だけど、どれかが効果を発揮するかもしれないし。緑露ちゃんは花壇をやるの？」

鯉壱は緑露が昨日そう言っていたのを思い出して聞いてみた。

「はい。鯉壱様がお庭を好きにしていいと言ってくださったので、お野菜の苗もいくつか買いました。新鮮なものがお家で採れたら、お料理にも使えますし。ハーブは後で森へ探しに行こうかなと思って」

鯉壱はコテージを中心に広がる、森の木々を見た。春の青々とした新緑が、風に吹かれてさわさわと揺れている。

コテージは、森の中の少しだけ開けた場所にあったので、どこからでも森の木々の様子が見えた。建物の横には柔らかい草が生えたゆるやかな丘もあり、そこには穏やかな風が吹き、あたたかな日差しが差し込んでいた。ここに転がると原っぱの芝が気持ちいいので、鯉壱はよく、濡れた体のまま日向ぼっこをしていた。しかしまだ、森の中には入ったことがない。

「一緒に行こうかな」

森の中でハーブを探すなんて、ワクワクする。緑露は微笑んだ。

「まずは、苗を植えてしまわないと。鯉壱様は着替えが必要ですね」

コテージにたどり着くと、鯉壱はウッドデッキで服を脱ぎ、庭仕事用の汚れてもいい服に着替えた。タオルと濡れた服は、手すりのところにかけておいた。太陽と風が乾かしてくれるだろう。その間に、緑露は買ってきたばかりの苗を畑の方へ運んでいた。そして鯉壱に、「納屋から道具を取ってきてくださいませんか？」と丁寧に頼んだ。

言われた通り、家の裏に向かう。納屋は、三角の屋根のついた、小さな物置のような形をしていた。緑露が説明書を見て、鯉壱が瞬きする間に一瞬で組み立てた納屋。鯉壱が、三時間くらいかけて白いペンキで塗った納屋だ。出来上がったとき鯉壱はへとへとだったが、緑露は鯉壱がペンキを塗っている間に家庭菜園のスペースを確保し、土を耕して肥料を漉き込み、畝をつくり、柵まで建てていた。

緑露ちゃんがいれば、僕は何にもしなくていいんじゃないか。納屋の扉の取っ手に手をかけながら、鯉壱は思った。僕は新しい自分になるために、新しい場所にやってきた。でも緑露ちゃんの登場は予想外だった。彼女はすごい人だし、一緒にいてくれてありがたいけど……。

鯉壱は小さなため息をついて、納屋の扉を開けた。ペンキを塗るためのハケとバケツ。それから、土を掘るためのスコップ二つ。メジャー、手袋、花に水をやるジョウロ。あれこれ引っ張り出してバケツに入れると、また緑露の元へ戻った。

戻ってみると、緑露は球根を綺麗に並べ直し、苗をポットから丁寧に外しているところだった。色とりどりの、さまざまな種類の花や植物が並んでいる。鯉壱はこんなにたくさんの種類の植物を見たことがなかった。蔓のようなもの、緑じゃない葉っぱ、ちいさなちいさな双葉が出たばかりのもの……。

「窓の下に花壇があったら素敵だなって思って、一週間くらい前に土を作っておいたんです」

緑露が楽しそうに笑う。

一体いつの間に……。鯉壱が目を丸くしている間、緑露は苗を並べ替えては置き直し、また

持ち上げて並べ直した。頭の中で、1年の間にどんな花がどのタイミングで咲いて、どう見えるかを計算しているのだろう。鯉壱は自分の頭にもお花をぎゅうぎゅうに詰められてしまいそうで、ちょっと不安な気持ちになった。

「これ、全部やるの？」

道具を渡しながらそう聞くと、緑露は「はい！」と楽しげににっこりした。

「鯉壱様は、お花はお好きではありませんか？　見ているだけでも、結構癒されますよ」

バケツからスコップを取り出す姿は、まるでパン屋の中でトングを持ってパンを選んでいる時のようだ。どれにしようかな、と呟く緑露は嬉しそうだった。

「見るのは嫌いじゃないよ。嫌いじゃないけど……咲かないかもしれないよ」

なんとなく、鯉壱は言った。スコップを下ろした緑露が、不思議そうにこちらを見る。

「僕、チューリップを植えたけど、芽が出なかったことがあるんだ。毎日お世話したけどダメだった。それでがっかりして、それ以来お花は触ってない。ママもお花好きじゃなかったし、よく枯らしてたし」

モゴモゴと言ってから、ママのことは言わなくてもよかった、と思った。こんな言い方して、緑露ちゃんは嫌な気持ちにならなかったかな。すくうように視線を上げると、緑露はただにっこりと微笑んでいる。

「芽が出るか出ないかは、そのときが来るまでわからないんですよね。出るかな～咲くかな～って、待つのが楽しいんです」

「そうかなあ……」

鯉壱にはまだよくわからなかったが、緑露ちゃんが言うならそうなのかな、と思った。お花は咲くまで時間がかかる。その分手間もかかる。それが無駄になると、すごく悲しい。でもそういうお世話も含めて、彼女は花が好きなのだろう。花壇のことは緑露ちゃんに任せよう。鯉壱が池の中をずっと見ていられるのと一緒で、緑露にはここが特別な場所なのだ。きっとみんなに、そういう自分の景色が必要なのだ。

そうやって自分を納得させていると、ふいに緑露が呟いた。

「よかったら、鯉壱様も植えてみますか？」

「え？」

緑露が微笑んで、何かの種を鯉壱の手のひらに落とした。小さいナッツのような三日月型で、でこぼこしていて、下の方が捻れるように丸まっている。これは花の種？　見たことのない形だ。植えたら何か、すごく奇妙な植物が生えてくるんじゃないだろうか。鯉壱が眉をひそめている間に、緑露はどこかから土が入ったポッドをいくつかを持ってくると、スコップで何やら作業をした。

「ここにお願いします、やさしく」

緑露に促され、恐る恐る、ポッドの入ったカゴの前にしゃがみ込む。そして言われるがまま種を落とし、その上に少しだけ土をかけた。ちいさくて奇妙な種は、あっという間に隠れてわからなくなった。

「こんなので大丈夫？」不安になって尋ねると、緑露は笑った。

「バッチリです！」

鯉壱は種まきが終わると、作業台の上からペンキの缶を、バケツの中からハケをとった。まだあの種のでこぼこした感覚が手のひらに残っている。不思議な感じだ。でも、こっちの仕事もやってしまわないと。もたもたしていたら、緑露は次々に花壇を仕上げて自分だけが夜までペンキを塗る羽目になる。鯉壱は腕まくりをして作業に取りかかった。

手を動かし始めると、作業は楽しかった。小さい箇所でも、自分の家を自分の手で作っているという実感が、心を満たしてくれた。手でペンキの缶の中にハケを泳がせ、もったりしたペンキを柵の上に乗せる。ハケで木目をなぞる感覚が手に伝わってくる。ペンキの垂れたあとが残らないように気をつけて、綺麗にできたら誇らしくなる。少しだけ薬品の匂いが混じった風の香りを感じながら、鯉壱は一心不乱に手を動かした。

緑露ちゃんも同じかな。ふとそう思って、緑露の方をこっそり見てみる。彼女は笑顔で、鼻歌混じりに花壇の周りに煉瓦を並べていた。思えば緑露は、今までのどんな作業もみんな楽しそうにこなしていた。終わった後の疲れさえ喜びだとでもいうように。いつも軽やかな笑顔だった。緑露のその笑顔が、鯉壱の口元までも自然と緩ませてきた。

「緑露ちゃん、ここに来てから、楽しい？」鯉壱は聞いてみた。緑露は少しだけ手を止めて鯉壱を見る。そしてちょっと照れくさそうに、はにかんだ。

「楽しいというか、鯉壱様と一緒にいられるのが嬉しいです。これからはたくさん、恩返しが

できる。やっと私も……」

照れ隠しなのか、喜びが静かに湧き上がっているのか、緑露は手をもぞもぞさせ、足元の土を手で押し固めはじめた。

恩返し。その言葉が、鯉壱の心を波立たせた。

緑露は、幼い頃から鯉壱のポフになると決めていたようだった。鯉壱がそれを知ったのは、彼女と出会ってすぐのこと。鯉壱がどこに住んでいるかもわからないのに、わざわざ探し出して来てくれたらしい。幼い頃、迷子になっていたときに助けてもらったから。それがこの恩返しの理由だそうだ。それを聞いて鯉壱は内心困惑した。僕は誰かに選ばれるような立派な人間じゃない。母親でさえ、六歳の僕を置いていったのに。

「本当に僕でいいの？　その、ご主人様になる相手。ポフは、選べるんでしょ？」

言い淀みながら呟いた疑問は、緑露を動揺させたらしかった。緑露の顔から笑顔が消えたのを見て、慌てて呟く。

「嫌なわけじゃないよ。緑露ちゃんが来てくれてから、いろんなことが快適になったし。一緒にいると楽しい」

全部本当のことだ。頼もしい同居人がいることは、思っていたよりずっと楽しい。でも、僕は一人で住むつもりだった。だからこんなにあれこれしてくれる人がいると、なんだか漠然と不安になってしまう。しかし、緑露の困惑した顔を見たら、そこまでは言えなかった。彼女を不用意に傷つけたくなくて、慎重に言葉を選ぶ。

「緑露ちゃんは平気なの？　この先も、僕と一緒に暮らすってことでしょ？」

「一人前になってサポートをする……鯉壱様のそばで、ポフの使命を果たすことが私の夢でしたから……でも、それは鯉壱様が許してくだされば……の話です……」

緑露は子犬みたいに唸った。その姿は、年相応の女の子に思えた。それがやりたいことなら、いいのかな。鯉壱はちらりと、コテージを見あげた。綺麗に屋根は塗り終わっているし、鯉壱の洋服が掛かっているウッドデッキの手すりも、緑露がささっと新しい木材で作り直して差し替えてくれたものだ。今塗っている、この柵だって……。彼女の助力は、鯉壱を魔法使いにしてくれるようなものだった。

「なんか、僕、びっくりしてるのかも。緑露ちゃんが本当になんでもできるから。僕のために、頑張りすぎてほしくないなって思ってる……」素直に口にしてみると、なんだか間抜けな理由に思えた。

「鯉壱様は心配せず、私に任せてください。必ず素敵な毎日にして見せますから」

にこりと頼もしい笑顔を浮かべる緑露に、思わず苦笑する。

「無理しなくていいからね。いなくなりたい時は、いなくなっていいから……そう思えるほうが楽でしょ？」

緑露が耕したおかげで足元の土はふわふわだ。その柔らかさが今はなんだか落ち着かない。今までと違う、新しいことをしているのだから、と自分に言い聞かせてみる。

顔を上げると、緑露は、そんなときが来るだろうか、と混乱しているようにも見えた。

「わかりました。万が一そう思ったら、そうします」

眉を下げたまま、渋々頷く緑露を見て、内心少しほっとする。

「よし……じゃあ……」
戸惑いながらも呟く。不安だけど、それが晴れるかどうかは、やってみないとわからない。
「よろしくね、緑露ちゃん」そう告げれば、緑露の不安そうだった表情が、ぱっと和らいだ。
「はい、鯉壱様。よろしくお願いいたします」
喜びに満ちた笑顔で、嬉しそうに言う緑露の顔は、どこか決意したような、安心したような顔にも見えた。頑張りすぎないでって、ちゃんと伝わってるのかな。
鯉壱は笑いながら、作業に戻る。緑露は、花壇に掘った小さな穴に、丁寧に花の苗を植え始める。そのやさしい手つきを見ていると、なんだか少しは安心できた。きっと大丈夫だ。ペンキの缶を覗き込む。あと、もう一息。鯉壱は気合を入れ直して、柵を塗り続けた。

集中したおかげか、鯉壱の作業は、緑露より早く終わった。鯉壱はスコップを持って来て、緑露の花壇作りの手伝いをした。そして花壇が出来上がり、たっぷり水をやったあと、二人は手を洗ってコテージの中に戻り休憩した。
リビングは二階まで吹き抜けになっていたので、緑露は十分体を伸ばしてリラックスすることができた。それでも、家の中にも改修した方がいい箇所は多そうだ。家の中を見回してみて、改めて考える。キッチンの高さ、扉の大きさ、棚の位置……。彼女の居心地を良くするために、諸々調整が必要かも。テーブルは元々広かったが、椅子は緑露のサイズに合うものがなかったので、彼女は二人がけソファに一人で座っていた。二人で暮らすために、やることはまだまだたくさんありそうだった。ふう、と自然とため息が出る。できることからちょっとずつ

やろう。

「郵便屋さんに行かなくちゃ」働き者の緑露は、嬉しそうに笑顔で言った。「無事に鯉壱様のポフになったと申請しなくちゃ」

「何か書類を書くの？」申請、という格式ばった単語を聞いて、つい眉が上がる。「ポフになるのって、もしかして結構大変？」

「いいえ」緑露はもう早速ペンを持って、どこかへ手紙を書いていた。「学校に、他のお仕事はもう引き受けられませんと知らせるだけです。鯉壱様はお疲れでしょうから、おやつを食べて待っていてください」緑露は走り書きの手紙を封筒へ入れ、いそいそと隣の部屋に消えた。声だけ遅れて聞こえてくる。「クッキーを準備してあります！」

クッキー。鯉壱は久々の単語に目を丸くした。長いこと食べていない。少し前まで住んでいたところには、クッキーは売っていなかったのだ。最後に食べたのはいつだっけ？

確か、ママと過ごした、最後のクリスマス……。

「何味がお好きですか？」戻って来た緑露が聞いた。「私、なんでも作れますよ！」

「ジンジャークッキーしか知らない」鯉壱は記憶を辿りながら、首を捻った。「ママはクリスマスにしか買ってくれたことなくて……。でももう随分前で、味忘れちゃった」

「ジンジャークッキーもいいですね」緑露が冷蔵庫から何か取り出した。おもちゃのように小さいが、クッキーの生地のようだ。冷蔵庫は普通のサイズだったが、緑露が使うとドールハウスの付属品のように見えた。「私のおすすめはチョコチャンククッキーです。チョコの塊をいれて、ホットミルクに浸して食べると最高ですよ。今日はプレーンですけど、今度作ってさし

あげますね」

緑露は出かける前にクッキーが完璧に焼き上がるよう全ての支度をこなしていった。オーブンの前に跪き、窓から中を見ながら、何かつまみをいじった。それから手を洗い、クッキーの生地を手際よくカットし、天板に並べ、メモを書いて、またオーブンを覗いた。カゴからミトンを出してカウンターに置き、「熱いので、取り出すときはこれを使ってくださいね」と鯉壱に言った。天板をオーブンにそっと入れると、タイマーをセットする。「焼き上がったら音が鳴ります」。あまりの素早さに、鯉壱はこくこくと頷くことしかできなかった。「では、行って参ります」

緑露が手に封筒を持ち、リボンのついた帽子をかぶって出かけていくのを、鯉壱は玄関で見送った。それから急いでキッチンに戻ると、オーブンの中の様子をそっと見た。中ではクッキーが行儀よく並んで、オレンジ色の光に照らされていた。まだ真っ白。そんなにすぐには焦げなさそうだ。鯉壱はふうと胸を撫で下ろして、そのままオーブンの前に座った。熱が肌を撫で、焚き火の前にいるようにじんわりとあたたかくて気持ちよかった。

クッキーを見ていると、母親のことを思い出す。一度、クッキーを焼いてとねだったら、焼きすぎてオーブンから煙が出るほど黒焦げにしてしまった。そのせいでオーブンは使えなくなってしまったが、ママはオーブンが悪いのよ、と言い訳をした。それ以来、クリスマスの日にお店で買ってくるのが当たり前になった。ママは、料理が得意じゃなかった。僕ももちろん得意じゃない。クッキーを焼いてみようとも思わなかった。あの日、炭みたいに真っ黒でぼろ

ぼろになったクッキーをみて、泣きそうになったのを覚えている。僕がわがままを言ったせいで、家が火事になりかけた……。

今、窓から覗くクッキーは、幸せの形そのものだ。全て綺麗な丸。ふっくらと膨らみ、ほんのりいい匂いがする。緑露ちゃんは本当に、なんでもできる。

「これからは、たくさん食べれるのかな……」

緑露が言っていた言葉を思い出す。クッキーってどれくらい種類があるんだろう。これからは、毎日違う味を試すこともできるのかな。それってすごく素敵だ……。

緑露がタイマーをセットしてくれたので、ずっとオーブンの前にいなくてもいいことはわかっていた。しかし、オーブンの前から離れがたくて、しばらく座ってクッキーが焼けていくのを眺めていた。

しばらくしてから立ち上がってタイマーを見る。まだかかりそうだ。待っている間に、もう一仕事しよう。片付けでもしようかな。そう思って辺りを見回したが、キッチンとリビングはすでにきちんと片付いている。緑露が整理を手伝ってくれたところは、すでに完璧だ。鯉壱はリビングに戻ると、手持ち無沙汰になって、キャビネットの引き出しを開けた。本、絵の具、書類、絆創膏、輪ゴム……。脈絡なく、ごちゃごちゃと突っ込まれたさまざまな物が見える。ここはまだ整理してなかった。引っ越してきたばかりの時、適当にあれこれ詰め込んでそのままになっていた。緑露も流石に棚の中や引き出しを勝手に覗いて、整理することはしなかったのだろう。しかし今後はわからない。いずれは整理しないと彼女に見つかってしまう。

ひとまず見なかったことにして、引き出しを閉じた。こっちの箱には何が入ってるんだろう

と、キャビネットの上に置かれた段ボールを覗き込む。中には丸まったカレンダーのほかに、大小のボールが二つと、四角い箱が入っていた。箱はシューズボックスほどの大きさで、左右の面に小さな取っ手があり、ひんやりしていて、ずっしりと重たかった。小さな金具で留めてある。開けてみると、そこもいろんな雑貨がごちゃごちゃと入っていた。なんだかキラキラしている、と鯉壱は思った。指でそっと掻き分ける。小さい指輪、緑の絵の具、オレンジ色のボタン……。底の方に埋もれるようにして、ポストカードも入っている。

美しい、港町の景色。鯉壱はハッとした。描かれているのは鯉壱の知らない場所だったが、このカードには見覚えがあった。一枚だけではなく、何枚もある。色とりどりの風景のカードが、ざっと二十枚ほどはあった。どれも異なる街のスタンプが押され、さまざまな場所から送られてきたものだ。ここにあったんだ、と思いながら、それでも眉は下がった。一枚手に取ると、裏面をひっくり返す。『元気にしてる？　大好きよ、ママより』と書いてある。いつ見ても短いメッセージ。それは、母が仕事先から送ってきたポストカードだった。どれも挨拶程度の文言しかない。それでもなんだか捨てるのはしのびなくて、引っ越すときそのまま持ってきたのだ。大好きよ、大好きよ、大好き……。ママの字はスラリと伸びて細い。どのカードにも走り書きのようなスマイルマークが笑っていた。判で押されたように繰り返される同じメッセージを指でなぞっていると、お腹の奥がすうっと冷たくなるような感覚に襲われた。鯉壱は、封筒を持って玄関を出ていった緑露の笑顔を思い出した。

きっとポフも、ずっといてくれるわけじゃない……。鯉壱の表情が自然と険しくなる。息が詰まるような感じがした。そうだ。緑露ちゃんもいなくなる日がくるかもしれない。ママと同

じように。

いなくなりたくなったらそうしてもいいと言ったのは自分なのに、そう考えると寂しさが込み上げる。鯉壱は首を振り、ポストカードをまとめると、また箱の中に戻した。今は、ママのことをくよくよ思い出すのはやめよう。僕は新しい場所に来たんだから……。鯉壱は自分の部屋に箱を持ってくると、クローゼットを開けた。奥の方に置いてあった靴箱を引っ張り出し、そこにその箱を置いた。それから箱の上にまた靴を積んで、見えないようにした。これでいい。そのとき、廊下の方からいい香りが漂って来て、鯉壱は急いでキッチンへ戻った。

オーブンを開けると、なんとも言えない素敵な香りが立ち込めた。鯉壱は言われた通りミトンをつけて、慎重に天板を取り出した。クッキーは美味しそうな狐色になって、一つ一つが輝いているように見えた。自然と笑みが溢れる。もうワクワクする気持ちが制御できない。いひひ！　と叫び出しそうな気持ちを抑えて、天板をカウンターの上に置く。火傷をしないように慎重に作業しないと。少し冷めるのを待ってから、一枚一枚丁寧に器に並べていく。指でつまむとほんのり暖かく、大きさはちょうど金貨のようで、とても高級なものに見えた。テーブルまで運んでくると、皿は真ん中に置いた。

完璧だ、と鯉壱は思った。こんなに美味しそうなクッキーは見たことがなかった。早く食べたい。ちらっと壁にかかった時計を見上げると、そろそろ緑露が帰ってきてもいい時間だった。緑露ちゃんは、食べててもいいって言ったっけ。あったかいうちに、ちょっとだけ味見したいな。でも、すぐ帰ってくるかもしれないし、一緒に食べたほうが余計に美味しくなる気も

する。鯉壱はクッキーを文字通り食い入るように見つめた。見れば見るほど、いますぐ食べてしまいたくてたまらなくなった。

もう我慢できない！　恐る恐る手を伸ばし、まだほんのりとあたたかい黄金色のクッキーを一つ掴んだ。香ばしい香りが鼻をくすぐる。「いただきます」と小さい声で呟くと、端っこを少し噛んだ。サク、と控えめな音が響いて、途端に幸せな気持ちでいっぱいになった。なんて美味しいんだろう……！　バターの香りとコクが、鯉壱の脳をあっという間にメロメロにした。すぐに残りを口に放り込んでもぐもぐ食べる。小さなクッキーだったが、どっしりと食べ応えのある味だった。気づくと手が勝手にもう一枚掴んでいた。大変だ。もぐ、とまた口が動いてしまう。止まらなくなる。全部食べちゃうよ。せめて飲み物を用意したい……体が言うことを聞けば……。両手でもぐもぐやりながら、素早く冷蔵庫に目を移す。と、キッチンの窓から外の景色が見えた。日差しが降り注いで心地良さそうだ。そうだ、と鯉壱は思った。

鯉壱はコップにミルクを入れ、クッキーを皿ごと外へ持ち出した。そしてまた池のところへやってくると、腰掛けられそうな場所を探して少しウロウロした。ちょうどいい綺麗な場所を見つけて、座り込み、水に足をつける。冷たくて気持ちよかった。ここからはコテージの様子も見えた。自分のお家の素敵な庭で、美味しいクッキーを食べる。なんて最高なんだ……。さわさわと風が頬を撫でて、鯉壱は思わず、はあ、と満足げにため息をついた。

コテージの出来栄えは、いい感じだった。自画自賛だが、本当にそう思う。塗られたばかりの柵も美しく仕上がっているように見えた。僕の場所。これからは緑露ちゃんも一緒。そしてこのクッキーも一緒だ。やっていけるだろうか、という不安はもう消し飛んでいた。もう一

つ、と食いしん坊のマダラカガは我を忘れて手を伸ばした。今の鯉壱は達成感と満足感も相まって、見境なく両手でむしゃむしゃやっていた。

甘いクッキーを一気に食べたせいだろうか。なんだか急に眠くなってくる。ミルクを一口飲むと、ふうと体から息が漏れた。そういえば柵を集中して塗ったし、結構疲れたかも。池を足につけたまま池の淵に寝転ぶ。柔らかい芝が鯉壱の後頭部をくすぐった。目を閉じると、太陽が瞼の裏までやさしくあたためた。

2　モンスターとの出会い

さて、クッキーを食べすぎてうとうとしているこのマダラカガを、木々の影から見つけた男がいた。彼は慎重に様子を伺い、あたりにマダラカガの子供以外誰もいないとわかると、池のそばまでやってきた。そして芝の上に寝転がっている子供を見下ろした。クッキーのかけらがくっついた皿、ミルクの雫がついたコップ。子供は動かない。すやすや寝ていた。柔らかな風が二人の間を吹き抜けて、その子が来ていた作業着をめくった。クッキーを食べすぎて膨らんだお腹が見える。間抜けで無防備なその姿に、男は大きくため息をついた。

なんでこんなところにマダラカガが？

彼は驚いていた。森のすぐそばのコテージは、二週間前まではボロボロで、誰も使っていないはずだった。今、屋根は真新しいペンキで塗られ、ウッドデッキの手すりは新品同然。しかも濡れた赤いパーカーとズボンが風に揺れていた。

迷子、というわけではなさそうだ。ただの迷子なら、ここで家庭菜園までしようとは思わないだろう。白いペンキで汚れた作業着に目を落とすと、予想は間違っていないように思えた。ここに住むつもりだよなあ、多分。

彼はどうするべきか迷った。ここでこのまま寝せておくわけにはいかないだろう……。となると……。そこまで考えて、またため息をついた。起こさないといけないよなぁ。それは彼にとっては、気の重い仕事だった。

ちゃぷちゃぷと、水面が揺れる音がする。頬を撫でる風の音。それに混じって子供がすやすや眠る寝息が聞こえる。穏やかな日差しの下で、食べすぎて眠くなったマダラカガが寝ている。

「平和だなあ」

思わず彼は呟いた。こっちまで眠たくなってきそうだ。このままもう少し、日差しの下にいたいような気もした。しかし同時に、そうしてはいけない気もした。

「起きろ。なあ、おい」

彼は乱暴に声をかけた。返事はない。触るか迷う。揺すって起こすか、と思ったとき、むにゃむにゃとマダラカガが眠たげに呻いた。

「なにしてんだ？」

「クッキーを食べたばかりなんだ」

目を擦りながら、鯉壱は寝ぼけたまま言った。「僕、疲れて……」と呟きかけてから、疑問に思った。誰？　緑露ちゃんじゃない。話しかけてきた男の方を見る。逆光でよく見えないが……。彼の背中には透明な羽が生えているように見えた。

「天使？」

「んなわけねえだろ」

男は呆れたように遮った。目を細めて、彼の顔を見る。少し長い黒髪で、前髪だけが白っぽい。瞳は青緑色だった。おでこに模様がある……。鯉壱はハッとした。彼の口元には牙がのぞいている。「うぁ～」と伸びをするときのような、間抜けな声が体から漏れた。

「モンスター？」鯉壱は目を細めながら尋ねる。
「そうだよ」男はまた、呆れたように答えた。
モンスター。鯉壱は眠たい頭で繰り返した。昔ママが言ってた気がする。でっかい虫で、リヴリーを攻撃して、食べるらしい。確か、あのおでこの模様はスズメバチだ。この人がそうなの？　スズメバチっていうからには、針があるのかな……。
鯉壱は太陽の眩しさに負けないようにしながら、男を見つめた。両手には何も持っていない。武器らしきものを下げているわけでもない。針も……なさそうだ。羽が生えていることと、おでこの模様、そして頭から触覚みたいなものが生えている以外は、自分と変わらないように見える。モンスターって、なんかもっと、クマみたいな、そういうデッカい凶暴なものかと思ってた……。僕を食べにきたってこと……？
鯉壱がぼんやり考えている間、目の前のモンスターは真顔のまま鯉壱のことをじっと見つめていた。鯉壱も彼を見つめ返す。二人はそのまま、お互いの様子を見ていた。片方が喋るか、何かするのを、もう片方が待っている。不思議な沈黙がしばらく流れて、鯉壱は思った。この人、このままずっと動かないのかな。
「……僕、逃げたほうがいい？」
沈黙に耐えかねた鯉壱が困ってそう尋ねると、スズメバチは驚いたように眉を上げて鯉壱を見た。そしてまたさっきの、呆れた声を出した。
「お前いくつだ？」鯉壱には、彼も困っているように見えた。「なんで逃げないんだよ……死ぬほど脅かさないといけないタイプか？」

鯉壱はよくわからなくなって、「死ぬほどはやめて」と文句を言った。目の前のモンスターはまた眉を上げた。この人、何しにきたんだろう……？　鯉壱は上半身だけ起き上がると、勇気を出して聞いてみた。

「……僕を食べにきたの？　そのつもりなら、頑張って逃げるけど」

鯉壱はチラリと池の方を見る。泳ぎなら得意だ。水の中に飛び込めば逃げ切れるだろう。スズメバチが泳げるかどうか知らないけど、きっとあの羽が邪魔で、スピードは出ない気がする。僕の方が速いと思う……。しかし、本音を言えばそうしたくはなかった。鯉壱は気づかれないよう、こっそりお腹を撫でた。動きたくない。このままじっとしていて、向こうがどこかに行ってくれるならその方がいい。だってお腹いっぱいなんだもん。急に動いたら苦しい。しかし、ここで食べられたくはない。鯉壱はモンスターが少しでも動いたら覚悟を決めようと、彼を注意深く見つめた。

スズメバチは鯉壱を見つめたまま、またため息をついたところだった。さっきからなんか、この態度はムカつく、と鯉壱は思った。それから男は、視線を軽く落として、自分の右の手のひらを見た。両手に白い手袋をしている。その手を軽く握ったり開いたりしながら、「どうしようかな……」と呟いた。

どうしようかな？　なんだか変なモンスターだ。僕と同じで、お腹がいっぱいなのかも。ぺこぺこだったらさっさと僕を捕まえて食べるはずだ。僕がさっき、緑露ちゃんのクッキーを我慢できなかったみたいに……。

彼があんまりじっとしているので、そのうち鯉壱は初めて見るスズメバチの特徴が気になっ

てきた。

背が高いけど、緑露ちゃんほどじゃない。牙はあるけど、爪は尖ってなさそう。手袋してるから、よくわからないけど。オレンジ色の、隊服のようなその服装を見る限り、理性をなくして暴れそうなほど凶暴そうでもない。むしろ白い手袋のせいか、社交的なようにすら思えた。傷とかもないし、態度が威圧的なわけでもない。背中から生えた透明な羽には光が当たって、キラキラしたプリズムが地面に落ちていた。綺麗だな、と見惚れたそのとき、スズメバチはゆっくりとその場にしゃがんだ。鯉壱は池の中に逃げることも忘れて、彼を見つめた。

日差しが外れて、彼の顔が見える。青緑じゃない、と鯉壱は思った。黄緑色の瞳だ。水中をたゆたう水草みたいな、やわらかくて、鮮やかな色だった。

「お前、マダラカガだろ」

「そうだけど」鯉壱は慌てて、すこしツンとした声を出した。それからさりげなく、尻尾を掴まれないよう反対側に引っ込めた。

「毒があるって本当？」

スズメバチは静かにそう聞いた。鯉壱はびっくりして目を丸くした。毒があると思ってるんだ。自分の尻尾に視線が落ちる。太くてすべすべ。そして、模様は派手なピンクと黒の縞模様。毒を持ってるカエルと同じ警戒色だ。

「そうだよ」と鯉壱は素早く答えた。「だから、食べないで」

スズメバチは眉を上げ、その懇願を聞いていた。それからふっと息を吐いた。

「そうか……」ほっとしたような、でも少し寂しそうな声だった。「じゃあ食べられないな」

なぜか、鯉壱は胸の奥が、きゅっと締め付けられるような気がした。嘘をついたせいだろうか……。

「食べないの？」

鯉壱は、自分が安心していることを悟られないよう、声色を抑えながら聞き返した。本当はふうと胸を撫で下ろしたい気持ちだった。でも、まだダメだ。まだ目の前にモンスターがいることには変わりはない……。

ドキドキしていると、スズメバチがふいに笑った。鯉壱は自分の心が読まれたのかと思って、一瞬どきりとした。しかし、何も起こらなかった。彼は動かなかったし、こっちにも近づいてこなかった。彼の口元に牙は見えたが、その笑顔は、困ったような、見守るような、不思議な笑い方だった。なんだ……。鯉壱はぼんやりとその顔を見つめた。怖い人じゃないのかも……。

穏やかな春の陽の光が、二人の上に降り注いでいた。池の水面がちゃぷちゃぷ揺れて、飛沫が鯉壱の足にかかった。ふいに、スズメバチが水面を見つめて、口元を緩めた。

「いいとこだな」

「うん……」鯉壱は素直に答えた。急に、心配なことが頭をよぎった。

「他のモンスターに言う？　僕がここにいること……僕、出ていきたくない」

スズメバチは、また眉を片方だけ上げて鯉壱を見た。よほど心配そうな顔をしていたのか、鯉壱の顔を見て、スズメバチは短く笑った。また呆れ混じりの笑い方だ。その態度はやっぱりムカつくと、なんとなく鯉壱は思った。

「わかった。言わない」
　スズメバチは笑いながら、短く、はっきりそう言った。信じられない、とは不思議と思わなかった。よく考えたら、毒があると思われているんだから、わざわざ他のモンスターに言って食べに来たりはしないか。鯉壱は急に、ふうと大きく息を吐きたくなった。嘘だとバレてない間は攻撃はされないだろう。目の前のスズメバチは首を振って鯉壱を見つめていた。
「誰にも言わないよ。秘密にする。信じていいぜ」
なんだかそこまで言われると、今度は信じられないな、と鯉壱はぼんやり思った。

　あのモンスターとどうやって別れたのか、鯉壱は覚えていなかった。気がつくと池の淵でまた眠っていて、起き上がったときには彼はいなかったのだ。代わりに緑露が穏やかな笑顔で、「おはようございます」と微笑んでいた。……夢だったのかな、と鯉壱は思った。起き上がると、とにかくお腹がいっぱいで苦しかった。
「緑露ちゃん、ごめん。クッキー全部食べちゃった」鯉壱はむにゃむにゃと言って、空っぽの皿とコップを拾った。
「お気に召したようでよかったです。今度はもっとたくさん焼きますね」
　緑露が手を貸してくれたので、鯉壱はなんとか起き上がれた。あの人が悪いモンスターじゃなくて良かった、と鯉壱はスズメバチを思い出して安堵した。こんなお腹で水の中に飛び込んでも、やっぱり逃げきれなかったかも。泳げたかどうかも怪しい。

「緑露ちゃんは、モンスターって知ってる？」ふう、とお腹をさすりながら、鯉壱は何気なく聞いてみた。「さっき、来たんだけど」と言いかけて、すぐ口を閉じた。やめて正解だと思った。緑露は平静を装っていたが、目の奥は恐怖で固まっていたのだ。

「モンスター？」緑露は微笑んだまま、少しだけ首を傾げた。しかし無理に表情を保とうとしたのか、ぎぎ、と首だけ動く人形みたいに見えた。「もちろん知っています。鯉壱様のようなリヴリーを、痛ぶって食べる種族です……。見たら逃げる。それだけ知っていれば十分です……」

緑露は小さく身震いした。そんな緑露の様子を見るのが初めてで、なんだか不安になった。緑露がちらりとこっちを見る。そして鯉壱の正面で膝を折って、肩をそっと掴んだ。

「モンスターを見たんですか？」緑露は低い声で真剣に尋ねた。目の色が変わっている。鯉壱は言葉に窮したが、嘘はつけそうにない。「怖くなかったよ」と小声で言ってみた。「何もしていかなかった」

「どんなのですか？　カマキリ？　ジョロウグモ？」

「ス、スズメバチ」緑露の圧に負けないように、頑張って呟く。「何匹いましたか？」

「一人だけ」

「一人？」緑露はそこでやっと目を細めた。「営巣地を探してたのかしら」

「えいそうちって？」鯉壱は聞くだけ聞いてみた。しかし緑露は答えなかった。というより、耳に届いていないようだった。ただ鯉壱の肩をそっと離したので、鯉壱はやっと息を吐けた。心臓が胸の奥の方に引っ込んでしまったような感じだった。緑露を見上げてみると、彼女の方

はまだ心配そうな顔をしていた。

「きっともう来ないよ」緑露を安心させたくて、鯉壱は呟いた。「僕、毒があるって言ったら、いなくなった」

「ああ鯉壱様」緑露は急に祈るように両手を組んだ。鯉壱はびっくりして少し飛び上がった。

「とても勇敢ですわ！　でも、次からは逃げてください。話を聞く相手ばかりではありませんよ。それに言葉を信じてもいけません。モンスターは嘘つきです。リヴリーを騙して捕まえて、食べてしまうんです！　見かけたらすぐ逃げる。絶対約束してください！」

「わ、わかった」鯉壱は上擦った声でうなずいた。「わかったから、落ち着いて」

緑露はそれから、みるみるうちに涙目になった。鯉壱はギョッとした。緑露がこんなに取り乱すところを見るのは初めてだった。どうしたらいいのかわからない。咄嗟に彼女の肩を支えて、声をかけた。

「緑露ちゃん！　泣かないで！　僕、大丈夫だよ」

「ご無事で本当に良かった……！」

緑露の大きな体を支えながら、鯉壱は困り果てた。あの頼もしい彼女をこんなに狼狽させるとは思ってもいなかった。緑露ちゃんは、モンスターのことが怖いんだ。そのことがなんだか鯉壱の心に不安を残した。あのスズメバチは、怖い人には見えなかった。でも、彼女の言う通り、嘘をついているんだろうか……他のモンスターには言わないと言っていたけど、もしそれが嘘だったら……。

鯉壱は怖くなった。急に辺りの景色が暗くなった気がした。空を見ると、ちょうど太陽が分

厚い雲に隠れたところだった。

その夜、緑露は心ここに在らずで、シチューの鍋をかき混ぜ続けていた。ジャガイモが形もなく溶けていく様子を見て、鯉壱は、緑露が怯えているのだとわかった。

緑露を落ち着かせてあげたいと、鯉壱は一晩、丁寧に説明した。何も怖い目にはあっていないこと。怪我もしていないこと。もしスズメバチがまた来たらすぐ逃げると約束すること。

緑露は鯉壱を守るため、しばらくどこにもいかないと言った。しかし鯉壱はそれを聞いて、余計心配になった。あのスズメバチは、戻ってくるだろうか？　戻ってきた時に緑露ちゃんを見たら、スズメバチはポフも襲うんだろうか？　あのスズメバチは、僕には毒があると思っている。でも、緑露ちゃんには警戒色はない。毒だってもちろんない。背は大きいけど、緑露ちゃんはただの女の子だ。僕、緑露ちゃんを守れるだろうか……。

次の日、緑露は鯉壱が起きるよりずっと早くから森へ出かけていたらしかった。鯉壱が起きると、部屋の窓から緑露が何か庭で作業をしているのが見えた。ベッドから這い出て窓から声をかけると、緑露は分厚い手袋をした手で、何かの植物を大量に抱えていた。

「イラクサです」緑露は寝不足の目で微笑んだ。「森で採ってきました。お薬にもなるし、乾燥させてお守りを作ろうと思って」緑露は途中で、深呼吸をした。「私、ちゃんと鯉壱様を守ります。あなたのポフですから」

緑露ちゃんは頼もしい。でも、ずっと一人で無理している。心配かけないように、僕がしっ

かりしなくちゃ……。彼女の微笑みを見ながら、鯉壱は心がざわついているのを感じた。

「触んないほうがいいよ。毒がある」

鯉壱が庭のイラクサを見つめ、その葉に鋭い棘があるのに気づいたとき、後ろから聞き覚えのある声がした。驚いて振り返ると、昨日のスズメバチがそこにいた。庭に植ったイラクサを見て、目を細めている。

「これ、童話に出てくるよな。素手で摘んで編んで鳥に着せると呪いが解けて人間になるヤツ。俺のこと悪魔かなんかだと思ってるわけ？」

「なんで来たの？」小声で注意すれば、モンスターは穏やかな顔でふっと笑った。

「また腹だしてんじゃないかと思ってさ。見に来た」

鯉壱は笑っていられる気分ではなかった。昨日の今日でまた現れるなんて。僕、毒があるって言ったのに。この人、僕のこと食べないって言ったのに。昨日の緑露の様子が脳裏に浮かぶ。モンスターは嘘をつく、という緑露の言葉が頭の中に響いた。

見てはならないと思えば思うほど、コテージの二階の窓にそわそわと目がいってしまう。朝早くからイラクサを摘んでいた緑露が、あの窓の部屋で仮眠しているのだ。

彼女がいることを知られたくなかった。次は逃げると緑露に約束したが、緑露を放って逃げるわけには行かない。

音を立てないようそっと立ち上がり、鯉壱は小声で尋ねた。

「他のモンスターに、僕のこと言ってない？」
「言ってないよ」
黄緑色の瞳のスズメバチは即答した。それから鯉壱の視線を追って二階の窓を見た。鯉壱は焦った。なんとか気を引こうと尋ねる。
「ほんとにほんと？　怪しいんだけど。誓える？」
「言って欲しいの？」モンスターは何故か楽しげだ。「毒があるんだろ、言わないよ。スズメバチだって食べるものは選ぶって。毒と言えば、イラクサは煮たら食べれるな。毒が抜けるから」
スズメバチが思い出したようにそう言ったので、鯉壱の心臓は飛び跳ねた。緑露がかき混ぜていたシチューの鍋を思い出す。とろとろの具材になりたくない……。黙っているのが怖くて、何か喋らなくてはと口を開けた。
「だ、だって、モンスターは嘘つきだって……」思わず口走ってから、しまった、と思った。
黄緑色の瞳が、こちらを見つめた。注意を引けたのは良かった。でも、今度は自分がピンチになったかもしれない。怒ったら攻撃されるのかな。そう考えたら、体が硬くなった。後ろは棘だらけのイラクサの畑だし、水辺に走っていくにはスズメバチの横を通らないといけなかった。捕まるかも。鯉壱はぎゅっと眉をしかめた。しかしモンスターはただ、なるほど、と言う感じで頷いただけだった。
「大丈夫。俺、わざわざ教えてやるほど他の奴らと仲良くない。一人が好きなんだ。お前と同じ。そうだろ？　じゃなきゃこんなとこ住まないもんな……。だから、聞かれたって言わない

よ。俺もここ気に入ってるし。めちゃくちゃにされたくないだろ？」彼は最後の方を、苦笑しながら言ってみせた。鯉壱の体から力が少し抜ける。

スズメバチは、また穏やかな笑顔で笑った。それから、その表情のまましれっと続けた。

「一緒に住んでる人、どんな人？　こわい？」

「え……」

頭の奥がぎゅっと縮こまったような感じがした。緑露ちゃんのこと、バレてる……。なんで、と呟きそうになった。しかし、ギリギリで口を結ぶ。落ち着くんだ。僕が緑露ちゃんを守らなくちゃ。

「誰のこと？　僕一人暮らしだよ」鯉壱が真剣な顔をしたのを、モンスターはまた笑って見つめた。

「一人暮らしでスコップ二個使うの？」と、家庭菜園の方を見る蜂散。庭の角の土の上にスコップが落ちている。鯉壱は足元が揺れたような気持ちがした。僕、片付けるのを忘れてたんだ。鯉壱が黙っているのを見て、スズメバチはまた二階を見た。

「ポフってさ、独り立ちしたリヴリーのところに、勝手に配布されて来るんだろ？　一緒に住むのに、相手を選べないなんて変だよな。どういう原理か知らないけど。お前のとこにもなんかでかいのが来たのかな～って。それとも、独り立ち前？」

スズメバチがのんびりとそう言うのを聞いて初めて、鯉壱は緑露が特別なわけではないのだと知った。みんなそうなんだ。緑露にノーと言ったら、別のポフが来たのだろうか？　その子も僕より大きい子なのだろうか？　一瞬考えたが、そんなことは今はどうでもいい。目の前の

モンスターの方がポフに詳しいという事実が、鯉壱をなんだか惨めな気持ちにさせた。イライラと首を振って、声は大きくしないよう、語気だけを強める。
「何しにきたの？」
「言ったろ、様子見に来たんだ」
「困るよ」考える余裕をなくして、鯉壱は正直に言った。
「僕、緑露ちゃんと約束したんだ。スズメバチに遭ったら逃げるって」
スズメバチは、へえ、と短くうなずいた。
「賢明だ。で、逃げないのか？」
「逃げたら緑露ちゃんを噛む？」鯉壱は言いながら悲しくなった。「そんなことさせられない」
「噛まないよ」スズメバチは感心したように呟いた。「ポフには興味ない」
だが、その言葉が本当かどうか、鯉壱にはわからない。
「駆け引きは苦手なんだ」鯉壱は勢いに任せてそう言った。「絶対噛まない？　嘘つかないって誓って！」
鯉壱の勢いに、スズメバチは面食らって頷いた。
「誓うよ」
森の中が急にシーンとした。あまりに静かだったので、自分が呼吸する音が聞こえるほどだった。いつのまにか息が上がっていた。落ち着こうと地面を見つめたが、イラクサの棘ばかりが目についてダメだった。鯉壱の様子を不思議に思ったのか、スズメバチは鯉壱が落ち着く

のを待っているようだった。それからゆっくりと話しかけてくる。
「なぁ、なんでこんなとこに住んでんだ？　ポフと二人で……家族はどうした？」
家族、という言葉の響きが、鯉壱の眉間に皺を寄せる。
「ママのことは……話したくない」鯉壱は疲れて、力無く呟くしかなかった。
「誰かに言うの？」
「言わないって」
「じゃあなんでいろいろ聞くの？」
咄嗟に自分の口から出た声は、悲しみと、怒りが混ざったような声色になった。スズメバチが一瞬、言い淀んだのがわかった。彼はどう伝えるべきか悩んでいるように見えた。しかし急に考えるのをやめた。ため息を吐いて、勢いに任せて言った。
「心配になったんだよ。お前、腹出して寝てたろ？　森の中にはモンスターがいるって知ってた？　ハンターならまだしも、どうしてお前みたいな子供が、街じゃなくて、わざわざ森の中に住んでるんだ？　喰われたいのか？」
「……教えない」
鯉壱は濁した。答えたくなかった。もう自分にはここしか居場所がないと、知られたくなかった。鯉壱には帰る場所がない。前住んでいた場所は幼い頃母親に預けられた親戚の家だった。水槽の底は、鯉壱が自分で選んだ自分の家だ。ポフが押しかけてこようが、モンスターが襲ってこようが、鯉壱には関係なかった。
「モンスターなんか怖くないよ」

自分を鼓舞したくて、わざと大きな声を出した。実際、目の前にいるスズメバチはそんなに怖くなかった。緑露ちゃんにも手を出さないって言うし、それなら放っておいて欲しいと思った。しかし彼は、少し地面を見てから鯉壱に静かに話しかけた。

「……残念だけど、俺みたいなのばっかりじゃないぜ。俺の仲間だって……。普通はお前の腹見たらそのまま噛みついて喰うんだ。そんで俺らの牙で腹を抉られたら死ぬ」

スズメバチは当たり前のことだというように、声色を変えなかった。その声色は、鯉壱の頭に静かに、効果的な映像を映した。お腹の中が冷えるような感覚になる。緑露が泣いたときのことを思い出す。あのとき緑露ちゃんは、こういうことを想像してたんだ……。

「だから……」

鯉壱は怖くなって、彼が続けるのを遮った。

「なんで気にするの？　昨日会ったばっかなのに」

「そんなことになってほしくない」

彼の声は大きくなかったのに、鯉壱はびくっとした。その真剣な表情からは、本気であることが伝わってきた。口元に牙が見える。本当だろう。モンスターはリヴリーを食べる。だから緑露ちゃんは泣いたし、逃げろと言ったんだ……。そういうモンスターが、彼の周りにも、たくさんいるんだ……。頭の中で、実感として恐怖が湧いて来る。手先が冷えていくようだった。

「ちゃんと、逃げられるよ……」小さな声が地面に落ちた。なんて根拠のないセリフだろうと自分で思う。クッキー食べすぎてひっくり返って、この人が本気でお腹を空かせてたら、僕は

今頃死んでたんだ。

元気をなくした鯉壱を前に、言いすぎたと思ったのだろうか。スズメバチは、ため息をついて首を振った。

「……余計なお世話か。毒があるんだもんな」

二人とも黙った。しばらく静かになって、鯉壱は一番最初の時を思い出した。あのときはお互いを見つめていたが、今は彼を見る気にはなれなかった。しょんぼりと俯きながら、鯉壱は呟いた。

「なんでわざわざ教えにきたの？　様子見にきて……」

「あ？　……あぁ……」しまった、という感じでスズメバチが口ごもったので、鯉壱は不思議に思って頭を上げた。彼は眉間に皺を寄せて言いづらそうに呟いた。

「俺、初手の対応間違えただろ……。お前は俺を怖がらなかった。今もこうやって話してる。だから、俺のせいかなって……」

彼が怖くない理由がわかった気がした。怖がって欲しいモンスターを怖がれと言うのは無理だ。緑露ちゃんがこの人と話せたらいいのに、と、咄嗟に鯉壱は思った。話せば、絶対に怖くないってわかるのに。だってこの人は、僕を心配してる。緑露ちゃんと同じなんだ。

「また来る？」

鯉壱は控えめな声で聞いてみた。目の前のスズメバチは、また混乱したような、困ったような顔をした。

3　次に会うとき

毒があるというイラクサは、意外と美味しかった。茹でると棘は気にならなくなり、ほうれん草みたいな濃い味がした。緑露は料理も上手で、彼女にとっては小さいおもちゃのキッチンにもかかわらず、驚くほどたくさんの美味しいメニューを作った。こってりした緑色のポタージュや、春の野菜と一緒のサラダが鯉壱のお気に入りになった。春の新芽は食べるのに適していて、お庭に植えたものは秋に収穫して縄にすると緑露は言った。縄になる？　鯉壱は驚いた。それも学校で習ったのだろうか？

「鯉壱様がもしアレルギーを起こしたら、ハーブティーにして差し上げますね」緑露はいつものように楽しげに微笑んだ。

モンスターが来なくても、たぶん緑露はイラクサをお庭に植えるつもりだったのだろう。鯉壱は緑露が笑顔を見せてくれるのが嬉しい反面、どうにかあのスズメバチへの誤解を解きたいと思うようになっていた。

他のモンスターは確かに恐ろしいのだろう。でも彼は、おそらく、僕らを助けてくれるはずだ。僕だけではなく、緑露ちゃんのことも。鯉壱はなんとなくそう思っていた。

お昼にハーブ入りオムレツを食べながら、鯉壱は窓から池を眺めた。水面に光が反射して、キラキラと光っている。あのスズメバチの羽根……。こんな感じで光ってたな。

緑露ちゃんに言ってみよう。そっと緑露の方を見ると、彼女はサラダのミニトマトを食べよ

うと、フォークで狙っているところだった。小さいフォークではまるまるとしたミニトマトをうまく刺すことができないようで、トマトは緑露のフォークからツルツルと逃げている。緑露の眼差しはかなり真剣だった。鯉壱はスプーンを一旦丁寧に置いてから、一つ深呼吸して、慎重に、でもなんでもないよというような雰囲気で、緑露に話しかけた。

「緑露ちゃん、例のスズメバチだけど」緑露がトマトを狙う手を止めた。「昨日も来たよ。僕、彼と話した」

「逃げてくださると、約束しましたよね？」緑露の目が、不安で細くなる。

「逃げたら緑露ちゃんが襲われちゃうかもしれないと思って……でも、モンスターはポフを襲わないんだね。彼から聞いた」

緑露は小さく首を振りながら、フォークを置いて、不安そうに握った手を胸に当てた。胸が痛いのだろうか、と鯉壱は不安になる。言わなきゃよかったかな……。

「……鯉壱様、もうお話しないでください」今この会話すら恐ろしいと言わんばかりに緑露は呟いた。鯉壱は怯んだが、頑張って続けた。

「あの人、怖い人じゃないと思う。緑露ちゃんは嘘をつくって言ったけど、そういう感じでもなかった」

「お話しして、確かめて欲しかったわけじゃありません……！」緑露が頭を抱えて訴える。

「でも僕……あの人と話しても大丈夫だと思う」ピリピリした空気だ。鯉壱は小声で、でも諦めずに食い下がった。緑露が小さくため息をついた。わかってもらえなさそうだ……と鯉壱は少し、めげそうになりながら思った。

「鯉壱様」どうしたらいいのかわからないと言うような、困ったような表情で、緑露は言葉を選んでいた。自分が、モンスターは嘘をつくと言ったせいで、鯉壱がのこのこ話しかけにいったと思っていそうな雰囲気だった。「好奇心が旺盛なのはいいことですが……」

それからしばらく、緑露は何か言いかけて、口を閉じるのを繰り返した。逢うのはダメ、と言いたいのだろう。話すのもダメ、そばに近寄るのももちろんダメだ。モンスターはみんな危ないから。だが、それを口にすれば、鯉壱の行動を制限することになる。緑露が別の方法を考えていたのだと、鯉壱は後で分かった。彼女が、「鯉壱様が危険な目に遭わないように、護衛いたします」と真面目な顔で言ったからだ。

「護衛？」

「もし、また来たら……」

緑露の顔がどんどん曇っていく。何か怖いことを想像していそうだ。鯉壱の顔まで不安で歪んでくる。そして緑露はやるしかないと、決意したように呟いた。

「また来たら、鯉壱様に二度と近づかないように、私、懲らしめます」

「え？」

鯉壱は呆気に取られた。懲らしめる？　モンスターを？　それってつまり、見つけ次第撃退するってことだろうか。考えたこともなかった。「そんなことできるの？」と鯉壱は言いかけたが、緑露の目の色は真剣そのものだった。いつのまにか何かのスイッチが入ってしまったかのように、緑露の顔から笑顔が消えていた。殺気さえ感じる、と鯉壱は思った。

一体、何をするつもりなんだろう？　モンスターを撃退できるほど、緑露ちゃんは強いのだ

ろうか？　そんなわけない。緑露ちゃんは体は大きくても女の子だ。あんなに怯えて震えていたのに、モンスターをぶちのめしたりはできないだろう。学校でだってそんな危ないことは教えないはずだ。モンスターがどんなに怖いものか教える学校でも、さすがに……。

できるのかな……？　緑露の表情を見ていると、頭の中ですでにシュミレーションが始まっている気がした。あの花壇の時と同じだ。できるできない以前に、やるかやらないかの問題になっているように思える。

ふと鯉壱の脳裏に、あのスズメバチの気の抜けるような笑顔がよぎった。もしかして、あの人、危ないんじゃ……。そこまで考えて、どうしよう、と思った。なんだか大変なことになった気がする。

「そんなことしなくていいよ！」鯉壱は飛び跳ねて叫んだ。

どう考えても穏便にはすまないだろう。モンスターはお腹に穴を開けられるんだよ、ともう少しで叫びそうだった。緑露がそんなことになるのは到底耐えられない。しかし、あのスズメバチが何か酷い目に遭わされるのも嫌だった。追い詰められたら彼がどんなふうに反応するか、鯉壱にはわからない。なんであれ、危険なことを緑露にさせたくはなかった。

「やめて！　緑露ちゃん、そんなことさせられないよ！」

「鯉壱様」緑露はさっきよりずっと、静かな声色で言った。「やらなければならないなら、私は、私の意思で、やります」彼女の魂が、精神がそう決意したようだった。

本気だ。鯉壱は背筋がスッと冷たくなるのを感じた。緑露ちゃんはやるつもりだ……。彼をやっつけるつもりなんだ。方法はわからないが、悪い虫がお家の中に入って来たときみたい

に、迎え撃って、仕留めるつもりなんだ。
鯉壱の顔が石のように固まったのを見て、緑露はふっと笑った。
「モンスターが来なければ、今までと何も変わりません。さあ、もうこの話はおしまい！スープのおかわりはいかが？」
それはいつも通りの穏やかな笑顔だったが、鯉壱にはもうスープの味もオムレツの味もわからなくなっていた。なんとかしなければ。鯉壱はスプーンを無言で口に運びながら思った。
彼と緑露ちゃんが、絶対に鉢合わせないようにしなければ……。

緑露はそれ以来、警戒体制になった。警戒と言っても表情は穏やかで、鯉壱に接する態度もいつも通り、格段に緊張感が漂うようなものではなかった。だから鯉壱は、その警戒が始まったことに、はじめは気づかなかった。しかし緑露は、気づくといつも、鯉壱の背後に立っていた。一メートルぐらいの距離をぴったりと離れず、どこにでも着いてきたのだ。常に緑露の視線は鯉壱の方を向いていた。花壇に水をやるときも、掃除や料理のときも、いつ見ても緑露は笑顔のまま鯉壱を見つめていた。これに気づいた途端、鯉壱の生活は途端に居心地が悪くなった。時間が経つにつれ、鯉壱は泣きそうになった。トイレとお風呂のときはドアの前で待っていたし、分担していた家事も、この期間は結局全て同じ行動を取ることになった。
日が暮れるのが待ち遠しかった。食事が済み、眠る時間になると、自室のドアの前まで着いてきた緑露におやすみを言えた。
「おやすみなさい、鯉壱様」

「う、うん、おやすみ緑露ちゃん。今日もありがとう」
「いいえ、良い夢を」
バタン、とドアが閉まって緑露の笑顔が見えなくなると、鯉壱はベッドにダッシュした。そしてそのまま枕に飛び込んで、「うわあああ！」と叫んだ。
「緑露ちゃん！　もうやめようよ！　僕おかしくなりそう！」枕に向かって叫ぶと、ドアの向こうから緑露の声が返ってきた。
「いいえ！　鯉壱様の安全のためです」
なんて献身的なポフなんだろう！　涙が出そうだ。モンスターなんかに近づかなければよかったと、鯉壱は激しく後悔した。彼はあれから、しばらく現れていなかった。庭にも出たし、池でも泳いだし、森で新しいハーブを探したりもしたが、緑露が微笑んでいる間はスズメバチどころがモンスター一匹姿を見せなかった。彼の気まぐれだろうか。それとも、この状況に気づいているのか……。
最後に会ったとき、別れ際に鯉壱は彼に、もう一度来てと頼んでおいた。緑露の誤解をどうしても解きたかった。分かりあうのは無理なのだろうか？　怖くないと知れば、緑露ちゃんだって気が休まるはずなのに……。
鯉壱はあれから何度も緑露に、こんなことしなくて大丈夫だよ、とコンタクトを試みたが、当然無駄だった。緑露はこれをポフの使命の一つと考えているようだった。でも、永遠には続かないだろう。このままあのスズメバチが現れず、しばらく平和に過ごせば、緑露もいつかは冷静になって、考えを変えるはずだ。でも、いつまで？　この異常な行動にはもううんざり

だった。鯉壱は、一刻も早く元通りになってほしかった。

そのためにはやはり、あのスズメバチともう一度会う必要があると、鯉壱は思った。緑露の目の前で誤解を解くしかない。

でなければ、モンスターが現れるたびに同じ状況になってしまう。鯉壱はため息をついた。緑露ちゃんは怯えている。怖いと思っているから、こんなに過剰に反応するんだ。だからやっぱり、怖くない人もいると思ってもらうしかない。

とはいえ、この厳重な警戒体制では、彼は現れないだろう。鯉壱は考えた。今まで二回とも、僕が一人でいる時にしか来なかった。たぶん、リヴリーが一人でいるかどうかがわかるんだ。

緑露を撒くのは至難の業に思えた。でも緑露を撒けさえすれば、彼には会えそうな気がした。今までもふらっと現れたんだ。きっと見つけてくれる……。鯉壱は長い長いため息を吐いて、窓から外の景色を眺めた。月が輝いている。今頃彼は、近くにいるのだろうか？

「ねえ」窓の外に向かって、小声で言ってみた。

「そこにいる……？」

返事はない。でも、聞いているかも知れない、と鯉壱は思った。尻尾を抱えて、布団に潜り込んだ。

次の日、鯉壱は早速、作戦を行動に移した。二人で朝ごはんを食べ終えて、二人で食器を片付けているときに切り出した。

「緑露ちゃん、キッチンが狭いと思わない？　僕がうろちょろするたびに、頭をぶつけないように屈んで移動してたでしょ？　今まで気づかなくてごめんね。もっと広くした方が、緑露ちゃんのためになると思う。玄関のドアも大きくしようよ。材料を買いに行かない？」
「確かに少し狭いかもしれません」緑露は片手を頬に当てて考えた。「でも、十分使えていますよ。今は鯉壱様を残してお買い物に行きたくないんです」
「家の鍵がまだ直せてないもんね……」鯉壱は玄関の方を見た。コテージのドアは古くなっていて、緑露が最初に家に入ったとき、勢い余って鍵を壊してしまったのだ。
「あそこから堂々とモンスター入ってきたら、やばいよね」
「やばいですねえ……」緑露は不安そうに言った。
「だから、二人で行けばいいよ。大したもの、家の中にないし。鍵も作りに行こうよ」
緑露は、鯉壱の方をじっと見た。
「鯉壱様、何か考えてますか？」
「考えてるって？」
「私の目の届かないところに行こうとか」
胸の奥から、うっ、と変な声が出た。しかし鯉壱はわざとにっこり笑って、緑露を見上げてみせる。
「してないけど」
「……」緑露は口をへの字に曲げて、鯉壱を見た。そして小さく息を吐いた。
「わかってるんです、こんなこと、意味ないって。でも不安でしょうがないんです。私、おか

しくなってしまっていますね。鯉壱様、ごめんなさい。あなたの行動を縛りたくないと、思っていたはずなのに」

鯉壱が目を丸くしている間に、緑露はしょんぼりと謝った。それから持っていた食器をシンクに置いて、鯉壱の方に向き直る。膝を折ると、居住まいを正して、鯉壱の手をとった。あったかい、と鯉壱は思った。

「私はあなたのポフです。鯉壱様。あなたの生活をサポートする。あなたがしたいことをおっしゃってください。私はそれをお手伝いします」

鯉壱は驚いた。本当は、街に行く途中で逃げ出して、その隙にあのスズメバチに会って、今すぐ家に来て僕のポフに自分は怖くないモンスターですと言って！　緑露ちゃんを正気に戻して！　とお願いするつもりだった。しかし、こうなると話が変わってくる。

僕のやりたいこと。正直に打ち明けるべきだろうか。もし、スズメバチに会いに行くと言ったら……。緑露は心配するだろう。きっとまた怖がって、本気で『懲らしめ』ようとする。二人が出会って、もしも攻撃しあったら……緑露ちゃんが怪我をしたり、痛い思いをしたら……。想像したら、辛くなった。今思うと、彼女をスズメバチに会わせるというのは、全くいい作戦ではないと思った。誤解なんか解けなくても、二人がこのまま出会わずにいられるなら、その方がいい気がした。

「一人で泳ぎに行ってもいい？　僕、また、服を着たまま潜りたい」

鯉壱が呟くと、緑露は優しく微笑んで、ただ、頷いた。

鯉壱は庭に出た。緑露は着いて来なかった。涼しい風が通り抜け、原っぱはいつもより広く感じた。空を見上げると、日差しはなんだか強かった。

池の淵まで歩いてきて、そのままざぶんと池に入る。水の中はひんやりしていて、気持ちがよかった。鯉壱は池の真ん中を泳いで行った。池は丘を横切るように続いていて、コテージと一番遠いところの岸辺は、森に近く、丘に遮られてコテージからは見えなかった。

彼に会って、正直に言おう。

冷たい水は鯉壱の頭を冷静にしてくれていた。

この間はもう一度会えるかどうか気にするような言い方をしちゃったけど、仕方ない。緑露ちゃんが怖がっているから、やっぱりもう来ないでと言う。そうじゃなきゃ、二人のどちらかが怪我をする。僕は大丈夫。緑露ちゃんもいるし、ここで二人でやっていけるよ。心配しないでと、そう言おう。

考えていると、だんだん申し訳なくなってくる。彼に嘘をつくなと言っておいて、自分は会うたびに彼に違うことを言っているな、と思った。

柔らかな緑色の水草の上を泳ぎながら、鯉壱は考えた。

もう来ないでと言われたら、彼は、どう思うだろう。心配してやっているのにと怒るだろうか。善意だったのにと、信じてもらえないことを悲しむだろうか。考えれば考えるほど気持ち

が沈んだ。緑露が怖がってるからというのは、理由になっているのだろうか。事実として正しくても、それを言うのは、なんだかズルい気もした。怖がってるって知ったら、嬉しいのかな。怖がって欲しがってたから、それでいいのかな。

ぐるぐると、頭の中を思考が回る。どっちみち、ちゃんと言うしかない。考えることがいっぱいありすぎて、嘘は上手く言える気がしなかった。

森の手前まで泳いでくると、鯉壱は彼を待つ間、底の方まで沈んだ。穏かな光が底まで届いていた。銀色の針みたいに細い小魚が、何匹か頭上を泳いで行く。

ここはいつ来ても素敵な場所だ。指の先に玉のような砂利が触る。水の流れを感じる。全てがこうだったらいいのに、と思った。いつ見ても綺麗で、最初から何もかもがあって、迷ったり、何かを選んだり、傷つけたりする必要がない世界だったらいいのに。鯉壱は急にさみしくなって、目をぎゅっと瞑った。ずっとここにいようかな、と思った。ここなら一人でいられる。なんにも変わらず、ずっとこのまま、ここに沈んでいたいな……。

瞼の裏を太陽が温める。はるか果てしなく遠くで燃える炎のゆらぎが、水の底にも、関係なく降り注ぐ。うっすら目を開けると、空を泳ぐ魚が見えた。ゆらめく水面の向こうに、太陽みたいなオレンジ色が揺らいだ。

彼だ、と鯉壱は思った。

「頭に草ついてるよ」水面に浮かんできた鯉壱を見て、スズメバチは笑った。

「元気だった？」
「元気じゃないんだ」鯉壱は正直に言った。自分の声があまりにも弱々しくて、自分で情けなくなるほどだった。
　スズメバチは、鯉壱が池から上がってこないのだとわかると、口元を緩めたまま岸辺にしゃがんだ。また、涼しい風が吹く。鯉壱はどう切り出していいか分からず、とりあえず落ち着こうと、近況報告をした。
「他のモンスターは今のところ来てないよ。ここってそんなに危ない場所じゃないかも」
　スズメバチは何も言わなかった。ただ、見るともなしに、キラキラ輝く水面を眺めていた。
「ここが好き？」鯉壱は聞いてみた。
「気持ちいいよね。だから僕、ここを家にしたんだ」ちらりと彼の方を見る。彼は何も言わない。言うことが見つからなくて、鯉壱は続けた。
「特に、水の底がいい。見たことある？　見てみた方がいいよ。すごく綺麗なんだ」
「ポフは一人になるなって言わなかった？」
　彼は突然そう言った。鯉壱は心を見透かされたようで、ドキッとした。すぐに返事ができない。でも、嘘も言えない。誤魔化すように少し沈みながら、岸から離れて、水の中に逃げた。
「……秘密」
「はは、秘密か」スズメバチは笑った。笑ってる顔はやっぱり全然怖くない、と鯉壱は思う。
「俺に会いに来たんだろ？」冗談っぽく、でも呆れたような声で、そのモンスターは鯉壱の方を見た。「言いたいことがあるんだろ」

緑露のことが、頭をよぎる。鯉壱は少し考えて、スズメバチのいる岸の方へ近づいた。
「その……緑露ちゃんは、動揺してて……」言い淀む鯉壱の言葉の続きを、彼はじっと動かず、黙って聞いていた。鯉壱は思わず、目を伏せた。
「もしモンスターと鉢合わせたら、懲らしめるって……。本気なんだよ……僕……」
言い淀んで、ちらっと彼を見る。モンスターは、怒ってはいなかった。悲しんでもいない。ただ、ふっとこっちを見たとき、穏やかな黄緑色の瞳が、一瞬だけ寂しそうになった気がした。
「普段はそんな子じゃないんだよ」鯉壱は喘ぐように言った。
「でも、たぶん、モンスターのことが……」
鯉壱は言葉を選ぼうとしたが、思いつかなかった。続きは、彼が言った。
「怖いんだろ」
平然とした声だった。当たり前みたいに言うのが寂しくて、鯉壱の肩が落ちる。
「そうだよな。そうかなあって思った。お前のポフが警戒してたの気づいたよ、近づけなかった」
「……やっぱり、僕が一人になるの、待ってた？」
「じゃないと危ない目に遭うだろ、お互い」
スズメバチは皮肉っぽく、小さく笑った。危ない目に遭う。彼はわかっていたのだ。鯉壱は口籠もる。もう来ちゃだめと、言わなくちゃいけなかった。確かにそう言おうと思っていたはずなのに、言えなかった。

「……僕、怖い人じゃないって言ったんだけど……」
「いいんだよ。俺たちみたいなのは怖がられてる方がいい」
彼の口調は優しかった。諦めたような遠い目。その瞳を見たら、ますます言えそうになかった。鯉壱は黙って水面を見つめていた。池の水が跳ねる音だけが聞こえて、そのうちスズメバチが立ち上がった。
「……もう来ない。お前のポフにそう言って」
「え、でも……」
「もう腹出して寝るなよ」
スズメバチは鯉壱の言葉を遮り、森の方へ歩き出した。一方的な展開に、鯉壱は戸惑った。彼の背中が遠くなっていく。このままでいいのか、と心の奥で思ったら、勝手に尻尾が動いた。水を繰って、体を押す。池の岸は細く湾曲して、少しだけ森の中に入り込んでいた。もう少しだけ、水辺が続くところまでは行こう。鯉壱は泳ぎながら着いて行った。
「……ねえ、あのさ……」
彼はこちらを見ない。なんて呼びかけたらいいのだろう。彼と話せるのはこれで最後かもしれない。そうと思うと、鯉壱の口から、ずっと気になっていた言葉が滑り落ちた。
「最初に会ったとき……なんで話しかけてきたの？　寝てるのが危ないなら、ただ追い払えばよかったんでしょ？」
返事はない。それでも鯉壱は続けた。
「おしゃべり、したかったの？」

そうだったらいいな。それは鯉壱が初めて彼と話したとき、なんとなく思ったことだった。何しに来たのかな。食べに来たんじゃなくて、おしゃべりしに来たのかな。「いいとこだな」って、あのとき彼はそう言ったのだ。スズメバチはすぐには返事をしなかった。しかし、立ち止まって、鯉壱を見下ろした。

「……お前が全然怖がんなかったから」こちらを見つめる黄緑色が揺らいで見えた。彼の表情からは感情を読み取れない。彼は視線を外して、ため息をついた。

「いや。違うな。楽しそうだったから。いいなあって思ったんだよ。一人でこんなとこで、腹出して寝てて、幸せそうだなって思った。俺のこと見ても眠そうにしてただろ。だから、話せるんじゃないかって、確かに思ったよ」

鯉壱はなんだか、ほっとした。彼が自分のことを話してくれて嬉しかった。しかしすぐに、

「でもまあ、」と彼は続けた。

「調子に乗ってやりすぎたよ。お前、まだ子供だし。悪かった。ポフに謝っといて」

話せてよかった、と彼が笑う。そしてまた背中を向けた。子供？　鯉壱は、胸が詰まったような気持ちになった。去っていく彼の背中に、何かが重なる。ぎゅっと眉をひそめて、その影を見つめた。彼の背中が遠くなる。口を開けたが、声が出てこない。詰まるような息が出てくるだけだ。

この景色を見たことがある。ゼロサーバーに置いていかれた時と一緒だ。あのとき、ママの背中が少しずつ、遠ざかっていった時と……。

鯉壱は焦った。引き留めないと。

「待って！」

今度の声は、自分でも驚くほど大きかった。池から岸へ、這い上がる。ずぶ濡れの体が重い。鯉壱は両腕に力を込めて、体を前へ押し上げた。服から水が流れ落ちて、立ち上がった鯉壱の足元を水溜りにした。その水音に、彼が立ち止まって振り返る。びしょ濡れの体で尻尾を抱えて立っている鯉壱を見た。体は冷えて、息は上がっていた。でもそんなこと、鯉壱は気にならなかった。

「……まだ喋ってる」息が乱れて声が震えた。スズメバチの瞳が、わずかに揺らいだ。

「僕、鯉壱だよ。子供じゃない。一五歳だ。一五〇センチしかないけど、もう大人だよ。一人でここに来たんだから」

スズメバチは混乱したように眉を下げた。鯉壱が、初めて自分のことを話したせいで、動けなくなったみたいだった。モンスターにそんなこと話すな、と言われそうな雰囲気だった。しかし、鯉壱は構わずに続けた。何か言わないと、引き止められないと思った。

「僕、ゼロサーバーから追い出されたんだ。知ってる？　こないだ閉鎖された。サーバーが消滅することになって……。僕は親戚の家に預けられてただけだったから、帰還用のチケットをもらえたけど、でも一人で、帰る場所がなくて……。それで、住むところを探して……二週間前、ここに来たんだ」

鯉壱は打ち明けた。緑露にもここまでは言わなかった。彼女はゼロサーバーから来たと言っ

ただけで全て察してくれたからだ。自分の口から言うのは初めてだった。ちらりと見上げると、彼は混乱したまま、でも鯉壱の方を見つめていた。鯉壱は一呼吸置いて、続けた。
「ゼロサーバーで一番強いのはクマだよ。けむくじゃらの、茶色い、爪があって」
「クマは知ってる」彼は眉を下げたまま、鯉壱の説明に口を挟んだ。鯉壱は頷いた。
「とにかく、今まで住んでたところに、モンスターはいなかった。スズメバチも、初めて見た。だから、怖がらなきゃいけないのかどうか、まだわかんない。緑露ちゃんは怖がって、逃げろって言うけど、僕、」
そこまで一気に言い終えると、鯉壱は彼を見上げた。彼はまだ鯉壱を見ていた。
「やっぱり怖い人に思えない。僕、逃げたくないよ」
鯉壱の言葉を聞いて、スズメバチは一瞬、苦しそうな顔になった。それから鯉壱から視線を外すと、何か考えるときのように、頭に手を当てた。
「そりゃ……クマに比べたら……そうだろうな……」
彼がぶつぶつ言うのを、鯉壱は黙って聞いていた。ずぶ濡れの体からまだ水が滴っていた。言ってしまった。緑露ちゃんは怒るだろうか……。ふと緑露の顔がよぎる。しかしそんなことよりも、このまま彼と別れる方が嫌だった。彼はそのうちふっと笑って、独り言のように空を見た。
「なんだよ、じゃあ、俺を怖がるとか、それ以前の話か」
彼と視線が合う。スズメバチはまだ口元に手を当てて、信じられないと言うように、小さく首を振りながら鯉壱を見ていた。

「モンスターを知らない？」呟く彼の口元が緩む。
「名前教えて」鯉壱は落ち着いてそう言った。一度に色々バラしてしまって、なんだか緊張の糸が解けたような気持ちだった。彼は少し迷っている様子で、鯉壱を見つめた。それから少しして、観念したように呟いた。
「……ハチルだ」
「はちる？」
鯉壱は目を細めて繰り返す。目の前のスズメバチは何も言わず、ゆっくり小さく頷いた。
「スズメバチのハチル。俺はセカンド出身だ。ゼロサーバーと違って、スズメバチがウヨウヨしてる街」ハチルが皮肉っぽく笑う。鯉壱は安心して、ため息を一つ吐いた。ハチルはそんな鯉壱の様子を見て、また小さく首を振った。
「ゼロサーバーからの移住者か。あそこから出て来た奴には初めて会ったよ。なるほどなあ……」呆れたような、観念したような声だった。
「マダラカガは、自分で自分の場所を探すんだよな」ハチルが独り言のように言ったのを、鯉壱は聞き逃さなかった。
「勇敢だよなぁ……ちっちゃいのに」彼が困ったように微笑む。その顔を見ていると、鯉壱は、やっぱりこの人は怖くないな、と思えた。
　と、そのとき、ハチルの後ろで、小枝が折れるようなパキッという小さな音がした。鯉壱が驚いて飛び上がる。ハチルは素早く振り向いた。

現れたのは緑露だった。手にはクッキーを持っている。鯉壱を探しに来たようだ。
「鯉壱様……？」
ハチルが、しまったという顔をした。鯉壱が引き留めたせいで緑露の気配に気付かなかったのだろう。完全に不意打ちだった。緑露とハチルが見つめ合う。鯉壱の心臓がひっくり返りそうになった。緑露ちゃん、と彼女に声をかけようとしたが、その前に、緑露が持っていたクッキーの皿が地面に落ちた。直後、パァン！！　と空気が破裂するような音がして、鯉壱は飛び上がった。緑露の蹴りが、ハチルの後ろにあった木の幹に当たったのだ。
「！？」
鯉壱はびっくりして息が止まりそうになった。ハチルがさっきまでいた場所の幹が凹んでいる。目にも止まらぬ速さ。鯉壱が息を呑むその間に、ハチルは飛び退き、間一髪避けていた。緑露の蹴りも早いが、ハチルも俊敏だ。不意打ちを喰らったにも関わらず、緑露の長い足から繰り出されるロングレンジの攻撃から逃れた。しかし木々が邪魔して下がりきれず、攻撃がわずかにかすったようだ。胸元に鋭く長い跡がついている。ハチルは驚いた様子で緑露を見つめた。
「マジかこいつ、」
ハチルが呟く間に、緑露がすかさずハチルに迫る。あっという間の速さだった。ハチルが緑露を睨む。しかしその顔がすぐ唖然とした。眼前に迫ったポフは、三メートル近い。ハチルが見てきたどのポフよりも大きかったのだろう。そしてそのことが、彼女の怒りをより凶暴なものにしていた。

「でっ…」思わず呟いたハチルを、また緑露の鋭いローキックが狙う。
「でっかくありません！　普通です！」
緑露の怒声が響き、追撃で繰り出されたキックがまた木々の枝をへし折った。ハチルはまたしても隙間を縫うように避けた。
あの体躯から繰り出される本気のキックがヒットすれば、流石のモンスターでも骨が砕けるだろう。鯉壱は慌てて何度か瞬きをした。ハチルは無事？　何が起こっているかよくわからない。最初の、パン！　という乾いた音と、バキバキ！　という木が裂ける大きな音が連続して聞こえる。ハチルはなんとか躱し続けているようだ。緑露も木々の中で素早く動くハチルになかなか狙いが定まらないのだろう。鯉壱は引き攣りそうな喉の奥から、声を絞り出した。
「りょ、りょくろちゃ」
と、またしてもブォン！　と緑露の長い足が空を切り、長いスカートが宙をはためいた。鯉壱の視界が遮られる。心臓が止まりそうになる。緑露は鯉壱を自分の後ろにすっかり隠すと、警戒したまま声をかけた。
「鯉壱様！　ご無事ですか？！」
鯉壱はびっくりしたまま固まっている。振り返る緑露。鯉壱が動いていないのを見て、泣きそうな顔で叫んだ。
「動かない！　彼に何をしたんですか！？」
「なんにもしてねぇよ！　お前が急に蹴ってくるからだろ！」
睨まれたハチルが混乱して言い返す。その態度が、緑露の怒りに油を注いだ。

「失礼なモンスターは許しません！！」
「うわっ！」
緑露のスカートが、モンスターを仕留めようとまた翻ったそのとき、鯉壱が我に返った。
「や、やめて緑露ちゃん、やめて！」
必死に叫ぶが、緑露の目にはハチルしか写っていない。怒りで声が届いていないようだ。緑露のスカートを掴もうとした鯉壱の手は空を掻き、彼女はハチルを追いかけて森の奥に踏み込んで行ってしまった。どうしよう。いや、考えている暇はない。とにかくどうにかして二人を止めないと。鯉壱はよろめきながら立ち上がって、破壊音が続く森の方へ足を動かした。

ハチルが防戦一方なのを尻目に、彼の速さに順応した緑露は、みるみるうちにモンスターを追い詰めていた。森の中では思うように動けないだろうとハチルは予想したが、緑露のパワーの前では狭さは関係無いようだった。ハチルが逃げる先を予測してハイキックで封じ、その木々でさえ攻撃に使ってくる有様だ。ただのポフじゃなかったのか。食いしばった歯の間から舌打ちが溢れそうになる。こんなにしつこく着いてくるなんて、このポフ、相当お怒りのようだ。頭の中とは裏腹に、下がるハチルの指先にはひやりとした感覚が走る。このままだと、防ぎきれなくなる……。脳裏に、『反撃』の選択肢が浮かぶ。しかし、そんなことをしたらあのマダラカガはどう思うか……。相当仲のいい二人なのだろう。鯉壱もこのポフを守るために、俺の前で叫んでたっけ……。
ためらうハチルの頭上に、緑露のキックが炸裂した。折れた木々が彼の視界を奪う。さらに

下がろうとした彼の背中を何かが強く打ち付けた。岩壁だ。ハチルは緑露に、地層が隆起する場所まで追い込まれていた。左右に広がる壁。後ろには下がれない。右に踏み込んだ瞬間、ひゅっと空気が裂ける鋭い音が耳のすぐそばを掠めた。緑露が蹴り込んだ場所で、石がバラバラと崩れる。ものすごいパワーだ。

モンスターでも素手でここまでの破壊力を持っているものは少ない。厄介すぎるだろ。緑露の鋭い視線に、ハチルの心臓が跳ねた。こんな強いなら、最初からマダラカガに腹出して寝させるな！　こんなもん、罠じゃねえか！　頭には泣き言が浮かぶが、嘆いても状況は変わらない。やばい。脳裏に不安がよぎった。殺されるかも……。

ハチルの頭の中に、声が響く。応戦しろ。戦え。嫌に低い、冷静な声だ。

まずは膝。折って動けなくしろ。リーチがでかい分、隙も長い。最初の攻撃は振りが大きかった。戦闘慣れしてない。きっと痛みで動けなくなる……。

痛み。確かに、痛いだろうな。でもそううまくいくかな。ちらりと見上げた緑露の瞳の奥は、怒りに燃えている。この手のタイプはたぶん、折ったくらいじゃ止まってくれない。膝をやったら頭……は遠いから、鳩尾に入れて、そのあと顎を砕いて、無理やり止めて……。

そこまで考えて、ため息が出そうになった。俺は何を考えてる？

俺はモンスターだ。この子の膝を折れる。顎だって砕けるだろう。長引けばこっちが殺される。だからこれは正当防衛だ。少し動きを止められれば、逃げられる。もう二度と戻ってこない。そして……。そこまで思って、あのマダラカガの姿が浮かんだ。勝手に眉が下がる。今度こそ、あのマダラカガにも怖がられる。

そう思ったら、逃げる気が失せた。戦う理由も急になくなった気がした。見上げれば怒ったポフが、次の一撃を繰り出そうとしている。痛いかなあ。ため息が出そうだが我慢した。骨は数本行くだろうな……。歩けなくなるかもしれない。まあ、仕方ないか。どうせ治るよ、俺はモンスターだからな。腕を構えて、頭の前で交差して、防御姿勢をとる。

彼女は諦めない。鯉壱を守るためだ。わかってるよ。大丈夫。

空気を割く音が聞こえる。咄嗟にハチルは目を閉じた。

が、痛みは襲ってこなかった。衝撃もなかった。目を開くと、静止しているポフの姿が見えた。なんで固まってんだ、と疑問に思った瞬間、視界の端に金色が光った。腕の隙間から下を見ると、ピンクと黒の、小さな姿に見合わない大きな角が見えた。

鯉壱だ。こっちに背中を向け、ポフの前に立って、両手を広げて立っている。

「やめて！」

鯉壱が叫ぶ。走ってきたのだろう、肩で息をして、次の言葉を言うのも苦しそうだった。

「緑露ちゃん、やめて」

鯉壱がもう一度、はあはあ言いながら絞り出した。しかし、緑露はまだ構えを解かない。だからハチルも動けない。誰も動かない。鯉壱が緑露を見上げた。緑露はまだハチルを見ている。しかし、一瞬動揺して、鯉壱に目を移した。その瞬間に、鯉壱は叫んだ。

「ハチルは友達だよ！」

ともだち、という言葉が、静かな森の中に響いた。

友達――？

今度はハチルが動揺した。今なんて言ったんだ？　一瞬困惑して、それからすぐに緑露の方を見る。嘘でもそんなこと言ったら、このポフが怒り狂って自分をすり潰すのでは、と思った。しかし、彼女はモンスターどころではなさそうだった。真剣な顔で、その場からピクリとも動かず、自分に立ちはだかる鯉壱の姿を見つめている。ポフはすっかり困惑しているように見えた。

「ともだち……？」

緑露の訝しげな視線に、「うん」と鯉壱ははっきり言った。うん？　まだ事情を飲み込めない。ただ小さなマダラカガを、呆然と見つめることしかできない。ポフの方は違った。鋭い眼光で再びハチルの方を睨みつけ、問いただしてきた。

「本当ですか？　脅して言わせたんですか！？」

「いやっ、俺は、何にも……！」

咄嗟にハンズアップして見せる。何が何だかわからない。

「ほんとだよ！！」

鯉壱は、目を瞑り、力の限り大きな声で叫んだ。その姿に、緑露が怯んだ。

「だから、やめて……」

続きは声が震えている。それを聞いた緑露は辛そうな顔になった。そして両手で顔を覆い、どしゃりと、その場にしゃがみ込んだ。それが小さな家が倒壊したみたいな勢いだったので、思わず「うおっ」と言った。

「ああ鯉壱様、ごめんなさい……」緑露が小さな声で呟く。
「危ない目に遭っているのかと思って、私……」
緑露の体は震えていた。鯉壱も彼女の様子に戸惑っている様子だった。彼はゆっくりそばまで歩いて行って、少し迷って、そっと優しく彼女の肩に触れた。
「ごめんね、こんなことさせて……僕、隠れて会ってた……言わなきゃいけなかったのに……」
そう言いながら、鯉壱はハチルの方を見た。ハチルも、その場に釘で打たれたかのように二人の様子を見つめていた。
「でも悪い人じゃないよ。僕危ない目に遭ってない」
緑露が顔を上げて、鯉壱を見つめた。涙に濡れた目は赤くなっていた。鯉壱が緑露の頬に触る。
「緑露ちゃんは平気？　怪我してない？　僕のために、ごめんね……」
「鯉壱様……」
緑露がまた顔を覆う。鯉壱は、今度は背伸びして、彼女の頭をゆっくり撫でた。
「……」
ハチルは鯉壱を見つめた。見つめることしかできなかった、というのが正しいだろう。助けてくれたのか、と思い至ると、わざわざ追いかけて来たのが信じられなかった。俺がポフに攻撃すると思ったのだろうか。怪我するかもしれないのに、間に飛び込んできた……。
混乱したまま、二人を見つめる。モンスターの俺に、どうしてそこまで……。そこまで考え

たとき、手を広げ、大きな声を出した鯉壱の姿がぼんやり浮んだ。友達だって、そう言ったんだよな。あの時……。

「ちゃんと説明するから……」

緑露を慰める鯉壱の言葉に、緑露が頷く。そのしおらしい姿は、鬼神の如き迫力だった先程とは打って変わって、年相応の女の子に見えた。鯉壱が、ハチルを振り返る。

「ハチルは？　大丈夫？」鯉壱が尋ねてくる。ハチルは驚いて声が出なかった。

「どこか打った？」

「あ、あぁ……いや、大丈夫……」やっとの思いで絞り出すと、鯉壱はよかった、と呟いた。

「歩いて帰れる？　明日もう一度来てね。僕、緑露ちゃんに全部話すから……」

鯉壱の言葉に、ハチルはただ頷いた。

4　ともだち

翌朝になって、緑露は落ち着きを取り戻した。正確には、落ち着きを取り戻すために、できたばかりの花壇に水をやっていた。

たっぷり水を入れられるジョウロはお気に入りで、この家にやってきたときもカバンに入れて持ってきたものだ。いつもなら水の流れる音と朝の涼しい風に吹かれて気持ちもリセットされるのに、今日は、気分が晴れなかった。

「ほんとだよ！」と叫ぶ鯉壱の顔を忘れられない。昨日の夜、緑露と鯉壱はあのスズメバチについて二人で議論した。鯉壱様は彼のことを本当に気にかけている、と緑露は思った。だからこそ、ため息が出る。

鯉壱様は、『あの人は怖くない』と言っていた。確かに、彼は一度も反撃してこなかった。応戦しようと思えば簡単にできたはずだ。最後だって一瞬……。思い出すとゾッとして、思わず体をさする。追い詰められた彼は、一瞬目の色を変えた。本気で攻撃する気だった。でも、結局してこなかった……。つまり、鯉壱が言っていたのは、本当だったのだ。彼には、自分が攻撃されたとしても、緑露や鯉壱を傷つけないという意思があった。

「私……鯉壱様のこと、信じてあげられてなかったんだ……」

思わず弱音が溢れる。信じる方が難しい、とも思う。モンスターはリヴリーを食べる種族と習ったし、今まで出会ったどのモンスターも、実際そうだった。近づいて言葉巧みに油断させ

て命を奪う……。そういう危険なモンスターはたくさんいるのだ。あのスズメバチは怪しい。まだ本性を表していないだけかも。しかし、鯉壱様はそうは思っていない。

「ともだち」という鯉壱の言葉が、頭の中で反響する。友達……。鯉壱様が、モンスターと……。一体、いつのまに？　それより、モンスターとリヴリーが友達になっても大丈夫なのだろうか？　大丈夫なわけない……。思わず眉間に皺が寄る。でも、鯉壱様がそう言うなら、信じてあげるべきでは……。

ジョウロの中身が、いつの間にか空っぽになっている。同じ花に水をあげすぎたかも、と緑露は顔をしかめた。花は水浸しになって、ぐったりしてしまっていた。何度目かわからないため息が出てしまう。

もう水やりはやめよう。ジョウロを持って歩き出すと、庭の向こう側、池のほとりの辺りから、鯉壱の話し声が聞こえてきた。隠れてそっと覗いてみると、鯉壱があのスズメバチと話しているところだった。

油断も隙もない……。緑露は思わず出ていきそうになったが、鯉壱が自分の名前を出したのが聞こえたので、慌てて体を引っ込めた。

「緑露ちゃんはもう怒ってないよ。昨日話したら落ち着いてた。でも、ちゃんとハチルとも話さないと、安全かどうかわからないし、許すかどうか決めれないっていうんだ。別に許してもらわなくても僕はいいんだけど……またこっそり会えば……ハチルは僕が一人でいるかどうかわかるんでしょ？」

鯉壱の「許してもらわなくても」という言葉が、緑露の胸に刺さる。鯉壱様からの信頼を無

くしてしまった。自然と眉が下がる。安心して頼ってもらえるポフでいたいのに、これじゃ彼を苦しめる存在と同じ……。でも、どうしたら分かってもらえるのかしら……あのモンスターが危険ではないと判断するのはまだ早い……。ため息と一緒に涙も出そうな気分だった。

鯉壱の声が、また小さく聞こえる。

「でも僕、緑露ちゃんにちゃんとわかってほしい気持ちもあるんだ……僕と同じ気持ちになってほしい……」

鯉壱の静かな声色が、池の上に響いた。緑露の胸が苦しくなる。思わず、口元に手が伸びた。

「鯉壱様……」自然と声が漏れた。

自分が鯉壱様にわかって欲しいと思うのと同じように、鯉壱様も同じ気持ちでいる……。緑露は俯いて反省した。間違ってたんだ。怖がって、モンスターだからという理由だけで拒絶して、自分の考えを押し付けてしまっていたかも。私は鯉壱様のポフとして、同じ視線に立つべきだったのに……。

「だから、緑露ちゃんと話してよ」

緑露がいることに気づいていない鯉壱は、ハチルにそう訴えた。しかし、ハチルの方はなんだかそわそわしている。殺されかけたのだから仕方ない、と緑露は思った。

「俺、誤解解いてもらえるのはありがたいけど、別にもう……」

「大丈夫！　大丈夫だから！　このままじゃ森で鉢合わせした時にぶちのめされるかもしれないでしょ？」

「いやいや、今度はちゃんと逃げるし……」
「無理だよ！　昨日だって逃げたのに、追いつめられてた！」
「う、それはその……」
「逃げないで、頑張って！　僕もちゃんとアシストするから……」
「うう、俺こわいよぉ……」
「しっかりして！」
怯えるハチルと、それを鼓舞する鯉壱。大きな子供と小さな大人のような二人の様子を見ていると、なんだか気が抜けて思わずフッと笑ってしまった。
ふと花壇の方に目をやると、プランターの上に、カレンデュラの小さな芽が出ている。鯉壱が種を蒔いた、あの花だ。緑露は目を閉じて、ふーっと長い深呼吸をした。
「そうよ、ちゃんと向き合って見極めないと……鯉壱様のためにも！」
顔を上げ、空を見上げると、春の薄い青空に吸い込まれるように、迷いは消えていた。

カレンデュラのポッドを陽の当たるところに移動させようと室内に持ってくると、リビングにはハチルがいた。緑露の方には背中を向けて、ウッドデッキの窓から池の方を見ている。こちらにはまだ気づいていないようだ。あんなに用心深かったのに、と緑露は思う。家の中にまで入れて、もう警戒する必要もないと思っているのだろうか。それとも、彼も家の中にまで入れてもらえて、びっくりして、ぼんやりしてるだけなのかしら。とにかく、私の目が黒いうちは、鯉壱様には指一本触れさせないから……。と、そこまで思ってから、ハッと気づく。いけ

ない。また意地悪に考えてた……。

　気を取り直し、ポッドはどこに置こうかと見渡してふと床に目をやると、虹色の光が落ちている。窓際から外を見ているハチルの羽根に陽が当たって、キラキラ光るサンキャッチャーのような灯りを落としていた。とても綺麗な光……。視線を上げると、ハチルと目が合う。瞬間、つい、またムッと鋭い眼になってしまった。

「どいてください」ツンとした声を出せば、ハチルが飛び退く。

「あ、すみませ……」

　フン、と鼻を鳴らしつつ、窓際にポッドの入ったカゴを置く緑露。ハチルはまだ相当びびっているようだ。なんだか、ちょっとだけいい気味。モンスターにこういう反応をされるのは、案外気分がよかった。ふふっと思わず笑みを漏らした時、小走りで鯉壱が入ってきた。

　鯉壱はそわそわとハチルに目配せしている。そして、緊張気味に口火を切った。

「緑露ちゃん、ハチルだよ。他のモンスターが僕を襲わないように、見張っててくれるって。ハチル、こっちは緑露ちゃんだよ……」

「よ、よろしくお願いします」

　握手しようと手を差し出すハチル。しかし、緑露はまだ手を取らない。ハチルが耐えきれず、鯉壱に目配せする。鯉壱が目だけでハチルを制し、首を振った。二人が何をしているのか緑露にはよくわからないが、言うべきことを言うだけだ。緑露は口を開いた。

「鯉壱様のことは私が見守ってます。あなたがいなくても大丈夫」

　ばっさり。ハチルが口を開けようとすると、鯉壱が遮った。

「でも、モンスターのことわかるんだって！　近くにいるとか、気配とか……」ハチルが無言のまま何度か頷く。

「緑露ちゃんが怪我したら僕悲しいけど、ハチルは丈夫……なんだよね？　なんか、怪我とかすぐ治るって！　あと森に詳しいから、迷子にならないって！　僕、こないだ森の中で図書館を見つけたから、案内して欲しいなあ。素敵な建物でね、落ち着くし、館長さんもいい人なんだ。でも森の奥にあるからちょっと心配で……。緑露ちゃんはついてきてもらうにはちょっとだけ大きいし、枝とか当たって危ないでしょ？　もし血とか出たら痛いし……」

鯉壱は体をゆらゆらさせながら、必死にモンスターをそばに置いておくことのメリットを説明した。そして、最後にちら、と緑露を見上げてくる。しかし、緑露はハチルから目を離さなかった。

「二人っきりにしろとおっしゃるんですか？　私はまだこの人を信用してません」

緑露の静かな威圧に、鯉壱は口籠った。

「いや、そのうちのはなしで……」

ついに鯉壱が、ハチルを一瞬見上げた。鯉壱が必死に説明している姿を黙って見ていたハチル。彼は、どうして俺にそこまで……と言いたげな顔をしていた。そして、緑露に向かって、おずおずと口を開けた。

「あの……。アンタが心配する気持ちはわかるよ。俺はモンスターだしな……簡単に信用するなって自分でも思う。でも俺、この子のこと絶対傷つけないって約束する。俺のこと、あー……その、咄嗟にでも、友達って、言ってくれたし……」

ハチルは、鯉壱を見つめながらそう言った。確かに、と緑露も思う。鯉壱様は彼を友達だと言った。鯉壱の方に視線を落とす。なぜか鯉壱は俯いて床を見つめていた。照れてる…？　よくはわからないが、動揺しているようだ。

「まず、アンタじゃなくて緑露です」

「え、はい、緑露さん、すみません」

低い声で唸ると、ハチルは黙った。緑露は姿勢を保ち、落ち着こうと深呼吸をした。鯉壱様の目線に立とう。ひとつコホン、と咳払いをして鯉壱の方に向き直る。彼の前にしゃがむと、鯉壱は目を泳がせていた。緑露は確信した。鯉壱様は嘘をついている。そしてそんな鯉壱が愛しいと、緑露は思った。だからなるべく声色を抑えて、彼女は尋ねた。

「……鯉壱様。モンスターの怖さについては、昨晩きちんとお伝えしたつもりです。彼が、そういうモンスターじゃないと鯉壱様が言うなら、私はそれを信じたいと思います」

「ほんと！？」

鯉壱の顔がパッと明るくなった。今にも緑露に飛びつきそうになったので、緑露はそれを止めなくてはならなかった。

「ただし、この質問にお答えいただかないと」

緑露に遮られた鯉壱は、不安そうに眉を下げた。

「彼は本当に、あなたのお友達なんですか？」

「あ……」

鯉壱は、戸惑いながらハチルを見た。ハチルも鯉壱を見ていた。彼は、黙っている鯉壱に少

し困惑しつつ、でも無理すんな、とでも言いたげに口元に小さい笑顔を浮かべてみせた。鯉壱は緑露の方も見た。緑露はなるべく真剣な表情を保った。しかし、鯉壱には目の奥で不安に思っていることを、悟られたかもしれないと思った。

「僕……ああ……僕……」

鯉壱は焦ったそうに首を振って、呟いた。

「まだ、わかんない」

やっぱり、と緑露は思ったが、ハチルの方は一瞬、感嘆にも似た声を上げた。

「鯉壱、お前、すげえ正直だな……」

「でも、たぶん……」鯉壱がハチルの言葉を遮るように言いかける。そして彼を見つめ、ゆっくり頷いた。

「そうなる気がする」

ハチルが鯉壱を見つめ返している。困ったような、呆れたような、安心したような顔。その顔は、緑露にも、恐ろしいモンスターには見えなかった。ああこれは、と緑露は思う。そして頭の中で繰り返した。鯉壱様のそばで、自分がポフとしてできることは、彼と一緒の世界を見ることだ。それが危ないことかもしれなくても。それから、諦めてため息をついた。ハチルがビクッとして緑露を見る。鯉壱も不安げに緑露を見た。

緑露はハチルに手を差し出した。ハチルが驚いて目を細める。彼の黄緑色の瞳は綺麗だ。不安が消えたわけじゃない。でも、彼が鯉壱様を傷つけないというのなら、追い出す理由はなさそうだった。

「私はあなたを見張ってますからね」

釘を刺して、牽制する。しかし、ハチルはおずおずと緑露の手を取った。モンスターの手を取るなんて変な感じ、と緑露は思う。きっとそれはハチルも同じだろう。居心地悪そうにしている。私より強いくせに、と思わないでもない。でも鯉壱様が見ている世界は、こういう感じなんだ。そう思うと、少し嬉しかった。

鯉壱がふう、と息を吐き、ハチルを見る。よかった、という安堵の気持ちと、喜びが口元の端に滲んでいた。ハチルの方は、少し困ったような顔だ。しかし鯉壱の視線に気づくとへらっと笑う。鯉壱はその笑顔を見て、吹き出すように、あはは、と声をあげて笑った。

おはなしのつづきは……

ここまで読んでくださってありがとうございます！

このあとの水槽の底のおはなしは、夏、秋、冬、そしてもう一度巡ってくる春へと続きます。鯉壱はお母さんとの思い出やトラウマを抱えつつ、二人と心から打ち解けることができるのか、緑露は鯉壱のへっぽこぶりを次々と目の当たりにしながらヤキモキし続けるのか、そもそもハチルはヘタレっぽいけど本当に信用できるモンスターなのか？！

残りは本になる予定なので、完成次第改めてSNS等で告知します。お楽しみに！（イベントに間に合わず、本当にすみません！）

間に合わなかったとはいえここまで書けたのは、このおはなしを書くきっかけをくださったイベントと運営の皆様のおかげです。心からお礼を申し上げます、ありがとうございます！

感想送っていただけると励みになります、よかったら絵文字だけでも送ってね！

2025/11/01　Suiren